

江戸川乱歩の世界

③ 屋根裏の散歩者
その他

目次

江戸川乱歩の世界

D坂の殺人事件

- 一、 事件の発生
- 二、 事件現場
- 三、 明智の部屋
- 四、 私の推理
- 五、 明智の推理
- 六、 結び
- 七、 心理試験

屋根裏の散歩者

- 一、 素人探偵明智小五郎
- 二、 屋根裏の散歩
- 三、 天井裏からの隙見
- 四、 覗きとは
- 五、 ツルの恩返し
- 六、 完全犯罪への誘惑
- 七、 薬の入手と毒薬の調合
- 八、 犯罪の遂行
- 九、 明智小五郎の登場
- 十、 明智の推理
- 十一、 推理の決め手
- 十二、 結び

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
D坂の殺人事件

D坂の殺人事件

例えば、江戸川乱歩の『D坂の殺人事件』という「作品」は、世間一般には非常に有名な作品ではあるが、その「内容」は、「本」（書物）で読む限りは、映画、その他の「映像」などに比べると、意外と単調シンプルという感じを受けるかも知れない。が、ここでは、できるだけ「本文」に寄り添いながら、その「魅力」を少しばかり考察してみたいと思う。

*

*

まず、本文の「冒頭」は、次のようなものである。つまり、「……それは九月の初旬のある蒸し暑い晩のことであった。私は、D坂の大通りの中ほどにある、白梅軒はくばいけんという、行きつけの喫茶店で、冷しひやコーヒーを啜すすっていた。当時、私は、学校を出たばかりで、まだこれという職業もなく、下宿にゴロゴロして本でも読んでいるか、それに飽きると、あてもなく散歩に出て、あまり費用のかからぬ喫茶店廻りまわをやるくらいが、毎日の日課だった。この白梅軒はくばいけんというのは、下宿屋から近くもあり、どこへ散歩するにも必ずその前を通るような位置にあったので、いちばんよく出入するわけであったが、私という男は悪い癖で、喫茶店に入るとどうも長尻ながじりになる。それに、元来食欲の少ない方なので、一つは囊中のうちゆう（財布の中）の乏しいせいもあってだが、洋食一皿ひと注文するでなく、安いコーヒーを二杯も三杯もお代わりして、一時間も二時間もじっとしているのであった。そうかと言って、別段、ウエイトレスに思召おぼし（恋慕う気持）があったり、からかったりするわけでもない。まあ下宿より何となく派手で居心地がいいのだろう」とある。

一、事件の発生

さて、「……私はその晩も、例によつて、一杯の冷しひやコーヒーを十分もかかって飲みながら、いつもの往来に面したテーブルに陣取つて、ぼんやり窓の外をながめていた。大通りを越して白梅軒はくばいけんのちょうど真向こうに、一見の古本屋がある。実は、私は先ほどから、その店先をながめていたのだ。みすばらしい場末すえの古本屋であるが、私にはちよつと特別な興味があつた。というのは、私が近頃この白樺軒で知り合つた、名前は明智小五郎というのだが、いかにも変り者で、それが頭がよさそうで、探偵小説好きなのだが、その男の幼馴染おきななみじの女が、この古本屋の女房になつていて、彼から聞いたのである。しかも、なかなかの美人で、なんとなく官能的に男をひきつけるところがあるという。彼女は、夜はいつも店番みせをしているのだが、今日は、なかなか出てこない。いかげんあきらめかけた時に、ふと、店の奥の間との境に閉めてある障子の戸こうし（格子）が、ピツシヤリしまるのを見た」とある。それを不思議に思うのだが、それは、蒸し暑い晩で、しかも、万引きされやすい商売であり、たとえ店に出なくても、当然どこかのすき間から店の様子は、見張つていなければならぬのに、すべてを閉めきつてしまうのは、何かおかしいと思うのである。

しかも、この喫茶店のウエイトレスたちの噂うわさでは、「……古本屋のおかみさんは、あんなにきれいな人だけれど、はだかになると、からだじゅう傷だらけで、たたかれたり抓つかられたりした痕きずに違ちがいがないわ。別に夫婦仲が悪くもないようなのに、おかしいわねえ」とある。すると、別の女性も、「……あの並びのソバ屋の旭屋のおかみさんだつて、よく傷をしてるわ。あれもどうも叩たたかれた傷に違ちがいがないわ」と言うのであった。これはもちろん、

読者に「或る事」を予感や期待などをさせながら、まさに「話」（ストーリー）は展開して行くという手法であり、一方、作品の「私」は、それを深く気に留めないで、ただ亭主が邪険なのだらうぐらいに考え込んでいて、あとになってそれがわかるという推移なのである。そして、格子を閉めたのは、ちょうど八時頃であり、それから三十分ぐらいじつと見ていると、たまたま通りに明智小五郎が通って、やがて店へと入って来るのであった。

そして、その明智小五郎との間で私は、例えば、「……絶対に発見されない犯罪というものとは不可能でしょうか。僕はせいぶん可能性があると思うのですがね」と言うと、それに対して、明智小五郎は、「……いや、僕はそうは思いませんよ。実際問題としてならともかく、理論的に言つて、探偵のできない（謎の解けない）犯罪なんてありませんよ。ただ、現在の警察に（それだけの）偉い探偵がいなくてもいいですよ」と言うのであった。そして、そのような話をしながら、二人は、ずつと古本屋の店先の方を見ていて、二人とも気づくのであるが、それは、まさに「本泥棒」（つまり「万引き」）であり、「……君が来てからまだ三十分にもならないのに、三十分に四人も、おかしいですよ。僕は、君の来る前からあすこを見ていたが、一時間ほど前にね、あの障子があるでしょう。あれの格子のようになったところが、しまるのを見たんですよ」と言うのであった。

そこで、二人は、何かあったかも知れないと思つて、喫茶店を出て、古本屋の店の番をする「畳敷き」のところまで行つて、大声で叫んでも何の返事も無い。そこで、障子を少し開けて、奥の間を覗いてみると、電灯は消えていて、どうやら人間らしいものが、部屋の隅に倒れている様子であり、そこで、二人ともドカドカと奥の間へと上がり込み、明智小五郎が電灯のスイッチをひねる（これは、昔の裸電球のソケットのスイッチをひねる）と、二人は、同時に「アツ」と驚くが、それは、明るくなつた部屋の片隅に、女の死体（古本屋の女房）が横たわっていたからである。しかも、それは、まさに「絞殺」（首をしめられ）て、すでに死んでいる状態であり、すぐに警察へ知らせなきゃと、明智小五郎は、公衆電話をかけに外へと出て行くという展開になるのである。

二、事件現場

さて、その「部屋」は、ひと間きりの六畳で、奥の方は、右一間は幅の狭い縁側を隔てて、二坪ばかりの庭と便所があり、板塀になつている。つまり、店の中からでは、「店番の畳敷き↓障子↓六畳の部屋↓狭い縁側↓二坪の中庭と便所↓板塀↓裏の路地」という配置になつている。そして、夏のこと、あけつばなしで、すっかり見通せる。——左半間はひらき戸で、その奥に二畳敷きほどの板の間（台所）があり、裏口に接して狭い流しが見え、裏口の腰高障子は閉まつている。また、向かつて右側は、四枚の襖になつていて、中は二階への階段と物入れ場になつている、ごくありふれた安長屋の間取りとある。死骸は、左側の壁寄り、店の間の方を頭にして倒れている。女は、荒い中形模様の浴衣を着て、ほとんど仰向き（顔を上にして）倒れている。しかし、着物が膝の上の方までまくれて、腿がむき出しになつているくらいで、別に抵抗した様子はない。首のところは、どうやら、締められた痕が紫になつているらしい。そして、店の前は、まさに「大通り」（D坂）で、人の往来は絶えないとなつている。そして、明智が「すぐ来るそうです」と言いながら、帰つて来る。

やがて、一人の制服の警官が背広の男を連れてやって来る。制服の方は、K警察署の司法主任であり、もう一人は、同じ署に属する警察医である。そして、その司法主任に、最初からの事情を大筋説明し、それに加えて、「……この障子の格子が締まったのは、恐らく、八時頃だったと思います。その時はたしか中にも電灯がついていました。ですから、少なくとも八時頃には、誰か生きた人間がこの部屋にもいたことは明らかです」と話すと、司法主任は、それを手帳に書き留めているあいだ、警察医は一応死体の検診を済ませていた。そして、その警察医は、「……絞殺ですね。手でやられたのです。それから、この出血しているのは、爪があたった箇所です。右手でやったものです。恐らく、死後一時間以上はたっていないでしょう」と言う。そして、司法主任は、主人はどこへ行っているのかねと聞くと、二人は何も知らず、そこで隣りの時計屋の主人を明智が連れてきて聞くと、「……この主人は、毎晩、上野の広小路あたりで古本の夜店を出していて、いつも十二時頃でなきや帰って来ません」と言う。そこで、一時間ばかり前に、何か物音を聞かなかったかと聞かれ、別段これという物音は聞かなかったと言う。また、人だかりができた中にいた、一方の隣りの足袋屋のおかみさんも、何も物音は聞かなかったと言うのであった。

さて、「大通り」(D坂) から見て、古本屋の右隣りは、時計屋であり、その隣りは、菓子屋である。一方、左隣りは、足袋屋であり、その隣りは、ソバ屋という並びになっている。(つまり、路地の角から順に「菓子屋、時計屋、古本屋、足袋屋、ソバ屋」という並びである)。やがて、表に自動車が停まり、警察からの通報で駆けつけた検事局の連中と、同時に到着したK警察署長、及び当時名探偵という噂の高かった小林刑事などの一行がドヤドヤと入ってきた。そして、先着の司法主任から一通りのことを聞き、特に小林刑事は、現場の様子や死体を念入りに調べた。そして、死体からだにはたたくさんの生傷があることを知るのである。また、裏の路地は、日当たりが悪く、ぬかるみで、下駄の跡が無数についていたとともに、その路地の先の角に店を出している菓子屋(アイスクリーム屋)の主人に聞いても、この路地に入出したものは誰もいなかったと言う。つまり、犯人の足跡も、また、遺留品も何もなく、唯一の手がかりは、電球のスイッチの「指紋」だけであるが、それは、明智の指紋以外、誰の指紋も出てこなかった。もう一つは、事件のあった八時前後に店の中にいた二人の工業学校の学生は、なにやら奥で物音がしたので、その障子の方を見ると、一人は、「格子」越しに、その格子もすぐに締まったのだが、黒っぽい服を着た男が一人ちらっと見えたと言ひ、もう一人の学生も、「格子」越しに、逆に、白っぽい服を着た男をちよつと見たと言ひのであった。この「矛盾」に対しては、明智小五郎は、最終的には、人間の「記憶」などは、あてにならないものだという判断を下すのである。

また、古本屋の主人が駈けつけるが、彼は、「……これ(妻)に限って人様の怨みを受けるようなものではございません」と言ひ、また、多くの「生傷」については、主人は非常に躊躇しながらも、自分がつけたと言ひのであった。

三、明智の部屋

さて、事件から十日が過ぎて、これという進展もなく、私は、煙草屋の二階に間借りをしているという、明智小五郎の「部屋」を初めて訪ねてみるのであった。それは、まず、

店のおかみさんが、下から二階にいる明智に向かって名前を呼ぶと、「オー」と返事があり、下に降りてきて、驚いた顔で、「やあ、上がりなさい」と言うので、彼のあとから二階に上がり、そして、彼の部屋へ一歩足を踏み込んだ時、私は、その部屋のアマリの異様に、アツと驚いてしまったとある。——それは、四畳半の座敷がすべて書物で埋まっていたからである。まん中のところに少し畳が見えるだけで、あとは本の山である。四方の壁や襖ふすまに沿って、下の方はほとんど部屋いっぱい本だらけであり、天井近くまで四方から書物の土手がせまっている。ほかの家具などは何もない。二人が座るところさえないほどである。仕方なく、私は、やわらかそうな本の上にすわり、二人は、例の「事件」について、その「推理」を話し始めることになるが、その前に、明智小五郎の「人物像」の描写があるので、それを参考までに少し書き留めておきたいと思う。

まず、彼は、これという職業を持たない一種の「遊民」であり、自分は、「人間の研究」をしていると言っているが、彼は、犯罪や探偵などになみなみならぬ興味と、おそるべき豊富な知識を持ち合わせていたのである。また、年は、私と同じくらいの二十五歳ぐらいであり、どちらかと言えば、痩せた方で、歩く時に変に肩を振る癖がある。それは、決して豪快流のそれではなく、講釈師の「神田伯竜はくりゆう」（若い時の写真ウェブ参照）に似たような歩き方であり、しかも、その「顔つきから声音こゑ」まで、彼にそっくりだとある。いわゆる好男子ではないが、どことなく愛嬌あいぎょうのある、最も天才的な顔を想像するがよいとある。ただ、明智の方は、髪の毛がもつと長く延びて、モジャモジャともつれ合っていて、人と話している間にも、指でそのモジャモジャの毛を引つ掻き回すのが癖だとある。服装なども、一行に構わぬ方らしく、いつも木綿の着物によれよれの兵児帯へこおびを締めているという。これは、もう有名な探偵「金田一耕助きんたいちこうすけ」に極似の「特徴」になるかと思う。というのも、過去のすべての「映画やドラマその他」のなかで、明智小五郎がモジャモジャ頭によれよれの木綿の着物をいつも着ているという設定は、ほとんど皆無ではないかと思う。しかし、これが、江戸川乱歩という作家が描く「若い時の明智小五郎の人物像」になるのである。

四、私の推理

さて、まだ若い明智の「部屋」を訪ねて来た「私」という人物は、次のように話し始めるのであった。それは、実は、今日、ここへ来たのは、例の「事件」について、その後、いろいろ考えてみて、もちろん、考えるだけではなく、探偵のように実地の取調べなども行なってみて、一つの「結論」に達したので、それを君に報告しようと思っただけだと言う。しかも、「……僕が到達した結論というのは、どんなものだかと思う。それを警察へ訴える前に、君のところへ話しに来たのは、何のためだかと思う」と言うのであった。

まず、主人公（私）の最初の「推理」であるが、それは、店の中にいた二人の「学生の証言」のなかで、一人は、黒っぽい服を着ていたと言い、もう一人は、白っぽい服を着ていたという「矛盾した証言」に対して、それは、いくら人間の眼が不確かだと言っても、正反対の「黒と白」とを間違えるのは変だと考える。そこで、むしろ犯人は、白と黒とのんだんだけの着物を着ていて、学生の二人が「障子の格子こし」のすき間越しに中をちらっと見た時に、一方の場合は、格子のすき間と着物の白地の部分とが一致して見える位置にいて、もう一人の場合は、格子のすき間と黒地の部分とが一致して見える位置にいたからと推理

する。そして、これは珍しい偶然かも知れないが、決して不可能ではなく、この場合、こう考えるほかに方法がないと言う。もちろん、明智小五郎は、ただ黙って聞いている。

次に、電灯のスイッチに「明智の指紋」しか残っていないなかったのは、一体、どういうことかの「推理」であるが、それは、次のようなものである。まず、警察の考え方では、多分、明智の指紋が犯人の指紋を隠してしまったのだろうというものである。ところが、主人公（私）は、そうではないという考え方に立つのである。そこで、^{すずり}硯を借りて、一つの実験をして見せるのだが、それは、右手の親指に薄く墨をつけて、半紙の上に一つの指紋を押し、乾いてから、もう一度、方向を変えて重ねて親指を押すと、そこには互いに交錯した「二重の指紋」がハッキリとあらわれる。つまり、「前の指紋」（犯人の指紋）を「後の指紋」（明智の指紋）で完全に消すことなど出来ないのである。それゆえ、犯人が最後に電灯を消したとすれば、必ず、犯人の「指紋」は残っていないなければならないという結論である。しかし、これは、犯人が手袋その他をはめている場合、また、付いた指紋を何かで拭き取ったという場合、その他などが全く考慮されていない不十分な「推理」であり、その結果として、次のような間違った「結論」を出すことになるのである。

それは、まず、その男は、太い棒^{ぼうじま}縞の着物を着て、恐らく、死んだ女の幼馴染^{おきななじ}みで、失恋の恨みなどがあり、主人の留守を知っていて、その留守を襲ったのである。また、抵抗した跡^{あと}がないのは、まさに二人は「顔見知り」であり、しかも、死体の発見を遅らせるために電灯を消したのである。——一方、犯人の失敗は、一つは、例の「障子の格子^{こうし}」の開いているのを知らずに、慌てて閉めたが、二人の学生に偶然にも見られてしまったこと。もう一つは、電灯のスイッチに指紋を付けてしまったこと。それに気づいたが、現場に戻るわけにも行かず、そこで、自分が殺人事件の「発見者」になることで、電灯に自分の指紋がついているをごまかそうとしたということである。

この「推理」のなかで、唯一「優れている」と思えるのは、犯人が現場に何らかの「証拠物」その他などを残した時に、再び、現場に戻ることはできにくく、そこで、自分が犯罪の「発見者」となって、その「証拠物」その他などを「隠す」（或いは「消す」という「考え方」である。そして、この「推理」は、当然のことながら、犯人は、まさに「明智小五郎」である、と見ているのである。——さて、そもそも、なぜ、主人公（私）は、わざわざ明智の所にやって来たのか？ それは、自分が到達した「結論」をぜひとも聞いてもらいたいためであり、そして、もう一つは、警察に訴える前に、明智にいわば「自首」を勧めに来たということでもあるのである。それゆえ、主人公（私）は、話をしながら、明智の「顔の表情」を密かに注意して見ていたが、何の変化もなく、相変わらぬ「ポーカーフェイス」を保っている。そこで、最後の「切り札」的なものとして、犯人は、まさに「……一体、どこから入り、そして、どこから逃げたのか」という最大の「難題」に対して、次のように「推理」するのである。

それは、古本屋の二つ隣りに「ソバ屋」があるが、その「……店の中は、土間つづきで、裏木戸まで行けるようになっていて、というのも、その裏木戸のすぐそばに便所があるからである。つまり、便所を借りるような感じで店に入り、そして、その便所へ行くような格好で、土間を通って裏木戸の方へと行き、そして、その裏口（裏木戸）から外へと出て行つては、再び、裏口（裏木戸）へと戻って来た」という推理である。——この「推理」は、基本的には、間違っていない。確かに、犯人は、ソバ屋の「裏口」（裏木戸）から

外へと出て行つては、裏の路地を通つて、古本屋の「裏口」(裏木戸)から古本屋の「部屋」へと入る。そして、再び、古本屋の「裏口」(裏木戸)から外へと出て、裏の路地を通つて、再び、ソバ屋の「裏口」(裏木戸)へと戻つて来た。確かに、その通りであるが、ただ、犯人は、いわゆる「明智小五郎」ではないのである。

五、明智の推理

さて、いよいよ「明智の推理」であるが、それは、次のようなものである。まず、主人公(私)の「推理」を黙つて聞いていたが、やがて、ゲラゲラと笑い出すのであった。そして、いや、失敬と言ひ、君の「考え方」は、なかなか面白いが、しかし、あまりに外面的であり、そして、物質的であると言ふ。——つまり、明智の「推理」の仕方は、「……僕の方方は、君とは少し違つて、物質的な証拠なんてのは、解釈の仕方でも何でもなるものである。いちばんいい探偵方法は、心理的に人の心の奥底を見抜くことである。だが、これは探偵自身の能力の問題ですがね。……」と言ふのであった。つまり、犯人の「心の中」(つまり「心理」)を深く読むことである。そして、犯人の「心の中」(つまり「心理」)を深く読むためには、外からの様々な「外的事実」などをあれこれ分析的にとらえるだけではまだ不十分であり、それとともに、大事なことは、自ら「犯人」となつて、その「犯人」の「内的世界」(つまり「心の中」)を徹底的に生きてみるることによつてこそ、初めて、犯人の「心の中」(つまり「心理」)というものを、わが身に感じて、実感として、より深く読み解くことができるようになるのである。……

さて、主人公(私)という人は、殺された「女性」(つまり「古本屋の女房」)と明智小五郎とは、いわゆる「幼馴染み」と聞いていたので、すぐにでも「二人の恋愛関係」を想像してしまつたが、それに対して、明智は、二人に「恋愛関係」が実際にあつたかどうか、また、彼女を現に恨んでいたかどうか、まさに「内面的に心理的に調べましたか」と聞き、そして、彼女とは、小学校へも入らぬ時分に、別れたきりだと言ふのである。

次に、「指紋」の問題であるが、明智の「推理」は、古本屋の主人からいろいろと話を聞いていたので、「……ハハハ、笑い話ですよ。誰が消したわけでもなく、電球の線が切れていて、自然と電灯は消え、そして、僕があわてて電灯を動かしたので、一度切れたタングステンがつながつたんですよ。古い電球は、どうもしないでも、ひとりでに切れることがありますからね」と言ふのであつた。——つまり、明智の「指紋」をはじめ、主人や女房の「指紋」などが付いていても不思議なことではなく、それ以外の指紋が付いていれば、それが犯人の「指紋」ともなり得るものであるが、電球は、自然と消えたとすれば、犯人の「指紋」は、電球に残るはずもないのである。つまり、犯人の(仮に)「誰々」という人は、この部屋の「電灯」には、一度もさわつたことがなかつたということである。

また、犯人の着物の「色」についても、例えば、『心理学と犯罪』(その中の「錯覚」や「証人の記憶」という章)などを主人公(私)に読ませて、法廷で、実際、一人の証人は、問題の自動車は、徐行していたと言ひ、そして、もう一人の証人は、早く走つていたと証言している。その他、結局、「……人間の観察や人間の記憶なんて、実にたよりないものですよ。あの晩の学生たちも着物の色を思い違へしたかも知れないし、また、格子のすき間から棒縞ぼうじまの浴衣ゆかたを思ひついた君の着眼は、なかなか面白いが、あまりにおあつら

え向きすぎて、そのような偶然を信じるよりも、僕の潔白を信じてくれないか」と言うのであった。——つまり、われわれ人間の「諸感覚」（つまり「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感ること」）などは、その時々々の「状況次第」では実際とは違つて感じられることはいくらもあり得るとともに、その時々々の「記憶」にしても、それほど正確かつ厳密なものではなく、むしろ「曖昧かついい加減なもの」も多くて、それゆえ、確かに、「……参考にはなるが、しかし、絶対的なものではない」ということである。

最後に、犯人は、「……一体、どこから入り、そして、どこから逃げたのか」という最大の「難題」であるが、それは、基本的には、主人公（私）の「考え方」と一緒であり、それは、次のようなものである。——つまり、犯人は、ソバ屋の「裏口」（裏木戸）から外へと出て行つては、裏の路地を通過して、古本屋の「裏口」（裏木戸）から古本屋の「部屋」へと入る。そして、再び、古本屋の「裏口」（裏木戸）から外へと出て、裏の路地を通過して、再び、ソバ屋の「裏口」（裏木戸）へと戻つて来た。ただ違うのは、主人公（私）は、ソバ屋の「主人」に、夜の八時頃、手洗いを借りた人がいたかどうかと尋ねた時に、いましたというような返答をそのまま信じたのに対して、明智の「推理」は、お手洗いを借りた人などいなく、実は、そのソバ屋の「主人」こそは、まさに「真犯人」であるという結論であり、それでは、その「根拠」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、明智が注意をひいたのは、「……古本屋の女房のからだには、全身に生傷なまきずがあり、また、ソバ屋の女房にも生傷なまきずがある」ということである。これは、一体、どういうことなのか？ というのも、明智は、彼女らの夫たちといろいろ話をしてみると、彼らは、暴力を振るうような、そんな乱暴者ではなく、また、古本屋にしても、ソバ屋にしても、おとなしそうな物わりのいい男に見えたからである。それでは、なぜ彼女たちのからだには生傷なまきずが絶えないのかと考えた時に、ふと「ある考え」が浮かんで来たということである。

そこで、明智は、まず、古本屋の主人に「なぜ夫人には生傷なまきずがあるのか」と尋ねた時に、古本屋の主人は、非常に躊躇ちゆうちよしながらも、やがて「自分がつけた」と認めるのであるが、しかし、それは、いわゆる「暴力」を振るつてではなく、むしろ「変態遊戯」のなかでついたものなのである。しかも、ここで最も大事なことは、古本屋の「主人」という人は、それほどの本格的な「残虐色情者」ではなく、むしろ「女房」こそは、まさに本格的な「被虐色情者」になつていて、むしろ女房の方がそれを望むようになっていたのである。それゆえ、本格的な「被虐色情者」であつた古本屋の「女房」にとっては、夫との「変態遊戯」だけではどこか物足りない、何か満たされない「想い」を抱いていたということである。

一方、明智は、ソバ屋の「主人」ともいろいろ話をしてみるが、彼は、ああ見えてもなかなかしっかりとした男で、それゆえ、探り出すのにもかなり骨が折れたが、しかし、ある「方法」（それは「心理学上の連想診断法」）によつて、うまく成功したとある。そして、実は、ソバ屋の「主人」こそは、まさに「マルキ・ド・サド」の流れを汲む、本格的な「残虐色情者」であつて、それゆえ、ソバ屋の「女房」には、そのからだに生傷なまきずが絶えないのである。しかも、ここで最も大事なことは、ソバ屋の「女房」という人は、それほどの本格的な「被虐色情者」ではなかつたのであり、それゆえ、本格的な「残虐色情者」であつたソバ屋の「主人」にとつては、自分の女房との「変態遊戯」だけではどこか物足りない、何か満たされない「想い」があつたということである。

つまり、ソバ屋の「主人」（それは本格的な「残虐色情者」）と古本屋の「女房」（それは本格的な「被虐色情者」）とは、知らず識らずのうちに、もつと自分を満足させてくれる相手を無意識に「探し求めていた」ということであり、そして、二人がばったりとめぐり逢うことよって、二人の関係は、急速に「親密な仲」になってしまったということである。そして、古本屋の「主人」が夜店に出かけるのを見計らって、夜な夜なソバ屋の「主人」が頻繁にやって来て、いわば「変態遊戯」に耽っていたが、事件のあった日は、その「変態遊戯」に余りに耽り過ぎて、誤って、古本屋の「女房」の首を絞め殺してしまったという事件なのである。それゆえ、ソバ屋の「主人」には、もともと「殺意」というようなものはなかったという結論になるのである。そして、二人が話しているところに、煙草屋のおかみさんが夕刊を持って来るが、その「夕刊」には、ソバ屋の「主人」が、いわば「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などに耐えられず、自ら警察に「自首」して出たという記事が載っているというところで、「本文」は、終わっているのである。

六、結び

さて、これが江戸川乱歩の『D坂の殺人事件』という作品の内容であるが、その中で、ある「方法」（それは「心理学上の連想診断法」）によって、ソバ屋の「主人」の「心理」を見抜いたとあるので、その部分を『心理試験』という作品ともからめて、少し考えてみたいと思うが、それは、次のようなことである。

まず、『心理試験』という作品であるが、それは、ある「大学生」（蒔屋清一郎）という学生は、まれに見る秀才であったが、いわば苦学生に近く、ある時、ふとしたことから同級生の斉藤勇さいとういさむという学生と親しくなる。そして、その「同級生」（斉藤勇）という学生は、六十に近い「官吏の未亡人」の素人屋しろうとに部屋を借りていたが、彼の話から、家主の「未亡人」である老婆は、奥座敷の「松の植木鉢」の底に「現金」（大金）を隠しているという情報を得る。そこで、主人公（蒔屋清一郎）という学生は、その「未亡人」（老婆）を殺害して、まさに「松の植木鉢」の底に隠された「現金」（大金）を手に入れようと、半年もかけて、綿密に「計画」を練りに練り上げて、いわば「完全犯罪」を狙って、夜ではなく、敢えて「昼間」に、実際に犯行を「遂行」してしまうのである。……

その時、主人公（蒔屋清一郎）は、なぜか「現金」（大金）をすべて奪わず、現金の「半分」だけを奪い、残り半分は、元の状態に戻し、しかも、その奪った「現金」を縁日で買った新しい「札入れ」に入れて、道で拾ったと警察署に「届け出る」のであった。それは、一年後には、いわば「落し主無し」で自分の「手に入る」と見込んでいるからである。また、「未亡人」（老婆）を手（手袋）で絞め殺した時、「……老婆は、苦しまぎれに空をつかんだ指先が、そこに立ててあった屏風に触れて、少しばかり傷をこしらえてしまう。それは二枚折の時代のついた金屏風で、極彩色の『六歌仙』が描かれたものだ」が、その時は、それほど大した問題にはならないだろうと考えて、老婆の蘇生（生き返り）を恐れて、今度はナイフで胸を刺し、未亡人の家を出た後は、長い時間、公園のベンチに腰かけて、ブランコに乗って遊んでいる子供たちをのどかな顔でながめ、それから、帰りがけに「警察署」（落し物届け）に寄り、そして、自分の下宿の部屋へと帰って来るのであった

さて、翌日、目覚めて、新聞を読んでみると、同級生の斉藤勇が、何と「身分不相応

の大金を所持している」ということで、老婆殺しの「容疑者」として警察に収監されているとある。その「経緯」は、主人公（露屋清一郎）による「老婆殺害」後、間もなくして下宿人の斉藤勇が部屋へと帰って来るが、やがて「老婆の死体」を発見する。その時に、ふと「松の植木鉢」の底の「現金」（大金）のことを思い出し、確かめて見ると、お金の包みがあり、それを盗んで「胴巻きの間」に入れたまま、警察に「家主」（老婆）が殺されたと届け出た時、身体検査も同時に受けて、そのまま収監されてしまったらしい。

その後、生前老婆の家に出入りした形跡のある者は、残らず召喚して、綿密に取り調べたが、一人として疑わしい者はなかった。それゆえ、さしずめ最も疑わしい斉藤勇を「犯人」と判断するしかなかった。ところが、一ヶ月後、事件の当日五千二百何十円在中の一個の「札入れ」が、警察署に届けられていて、しかも、その「拾い主」が、何と容疑者の斉藤勇とは親友の「露屋清一郎」ということで、さっそく召喚の手紙を送っては、露屋を訊問してみたが、大して得るところがなかったのである。そして、この一ヶ月半のあらゆる捜査の結果、彼ら二人を除いては、一人の容疑者も存在しなかった。そこで、万策尽きた笠森判事という人は、いよいよ奥の手を出す時だと思つて、従来しばしば成功した「心理試験」というものを施そうと決心するのであった。

七、心理試験

さて、その「心理試験」であるが、それは、大きく「二つ」に分類できるものであり、その一つは、純然たる「生理上の反応」によるものであり、それは、犯罪に関連した様々な質問を發して、被験者の身体上の微細な反応を、適当な装置によつて記録するものであり、例えば、いわゆる「うそ発見器」などは、まさに「代表的な装置」であり、具体的には、手の微妙な動き、眼球の動き方の記録、呼吸の変化の記録、脈搏の動きの測定、また、手の平の微細な発汗などによる方法、その他、いろいろあるということである。

そして、もう一つは、言葉を通じて行なわれるものであり、例えば、精神分析家が病人を見る時に用いる「連想診断」というものがあり、それは、ある「言葉」を聞いて、それから連想されるものを「答える」というものである。例えば、「財布」と聞いて、「お金」と答える。また、「殺人」と聞いて、「血」や「ナイフ」と答える。つまり、事件とは全く関係ない「言葉」と、事件と何らかで関連する「言葉」とをうまく組み合わせ、次から次へと「質問」をして、その時の「答え」と「答え方」（微妙な反応の仕方）などを厳密に観察をして、容疑者の「心理」をできるだけ深く探ろうとするものである。

例えば、有名な『刑事コロンボ』なども、犯人に様々な「言葉」を投げかけて、その微妙な「反応の仕方」などを厳密に見極めているのである。そして『刑事コロンボ』の場合、犯人は、すべて「知能犯」（完全犯罪を狙う人）であり、しかも、最初から犯人が「人を殺す場面」（つまり「殺人現場」）その他などをすべて見せてしまい、最後に、たった一つだけ残して置いた「決定的な証拠」で、犯人を最後「落とす」という手法なのである。この『心理試験』という作品も、たった一つの「証拠」で決着を付けるのである。

さて、主人公（露屋清一郎）という人は、いわゆる「心理試験」に備えて、徹底的に練習を積み重ねて、どのような「言葉」に対しても、ためらいも躊躇もなく、ごく自然に反応でき得るように訓練をして、実際の「心理試験」でも、その通りの結果を出すのである。

一方、もう一人の「容疑者」(斉藤勇)の場合には、神経過敏なところもあり、ためらいや躊躇などもあり、主人公(露屋清一郎)に比べると、すべて「遅い反応」になっている。この「結果」を見る限りは、斉藤勇の方が「疑わしい」ことになるが、笠森判事は、自宅の書斎で、もう一つ「確信が得られない」と思っているところに、ある事件から心易くなっていた何と「明智小五郎」が訪ねて来るのであった。そして、この話は、「D坂の殺人事件」から数年後のことで、彼はもう昔の書生ではなくなっていたとある。

そして、もう一度、主人公(露屋清一郎)を「判事の私宅」へと呼び寄せるのだが、それは、「……君を疑ったことをお詫びかたがた、その事情をお話するために、わざわざ来て頂いたわけです」ということで、話もスムーズに進み、いつの間にか時間もたつて、主人公(露屋清一郎)が帰り支度をはじめ、「……では、もう失礼しますが、別にご用はないでしょうか」と聞くと、「おお、すっかり忘れてしまふところだった」と、同席していた明智小五郎は、快活に話し始めるが、もちろん、これは、主人公(露屋清一郎)をすっかり安心させておいて、主人公を「ワナにはめる」ためのお膳立てなのである。そして、「……あの殺人のあった部屋に二枚折りの金屏風が立ててあったのですが、それにちよつと傷がついていたといつて問題になっていのですよ。ご存じないでしょうか……」というような感じで話しかけるのであった。それに対して、主人公(露屋清一郎)という人は、「……あの部屋に入ったのはたつた一度きりで、しかも、事件の二日前であり、その屏風のことなら覚えていますよ。僕が見た時には確か傷なんかなかったですよ」と言うのであった。これは、一体、何のワナを仕掛けたのかと言えば、それは、次のようなことである。つまり、主人公(露屋清一郎)という人は、「……事件の二日前に、屏風を見たと言っている」。実際、二日前に老婆の部屋に入って世間話をしているのである。それは、一体、何のためかと言えば、それは、斉藤から例の隠し場所を聞いてから、もう半年を過ぎた今、それが当時のままかを確かめるためであり、その方法は、お金を隠しているような噂があるような話をする、彼女の目は、その都度、床の間の植木鉢にそつと注がれ、それを見て、間違いないと確信するのであるが、その日に、屏風を見たと言っているのである。

ところが、その「屏風」というのは、実は、「……事件の前日に持ち込まれたものであり、事件の二日前には、その部屋には屏風などなかった」のである。——つまり、「事件」当日には、確かに「屏風」があり、その「屏風」の小野小町の顔のところ少し傷を付けてしまったために、そのことがあまりに強く「頭」(印象)に深く残ってしまったがために、事件の二日前にも、当然のことながら、その部屋に「屏風」はあつたはずだと「錯覚」(勘違い)をしてしまい、ついつい「その屏風のことなら覚えていゝ」などと軽々しく口走つてしまい、しかも、主人公(露屋清一郎)という人は、その「屏風」には、極彩色の『六歌仙』の絵が描かれている、とまで言つてしまったのである。

それでは、なぜ、これが「致命的な失言」となるのかと言えば、それは、「……あの部屋に入ったのはたつた一度きりで、しかも、事件の二日前である」と言っている。つまり、事件の二日前と言えば、部屋にはまだ「屏風」などなかった状態である。そのなかつたはずの「屏風」があつたと言ひ、しかも、その屏風には『六歌仙』の絵が描かれていたなどと、見てもいないのに、どうして言えるのか？ それは、まさに「事件」当日に、その「屏風」を見たからであり、もちろん、見ただけではなく、その「屏風」の小野小町の顔のところ少しばかり傷を付けてしまったというあまりに強い「意識」があつたがために、ま

た、犯人は「斉藤勇」^{さいとういさむ}で決定ということ、すっかり気をゆるめてしまい、いわばうかれ気分、このような「致命的な失言」を生み出す要因になってしまったのである。

*

*

江戸川乱歩の世界
屋根裏の散歩者

目次

江戸川乱歩の世界

屋根裏の散歩者

- 一、 素人探偵明智小五郎
- 二、 屋根裏の散歩
- 三、 天井裏うらからの隙見すき
- 四、 覗きとは
- 五、 ツルの恩返し
- 六、 完全犯罪への誘惑
- 七、 薬の入手と毒薬の調合
- 八、 犯罪の遂行
- 九、 明智小五郎の登場
- 十、 明智の推理
- 十一、 推理の決め手
- 十二、 結び

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
屋根裏の散歩者

例えば、江戸川乱歩の『屋根裏の散歩者』という作品は、誰もがよく知っている「作品名」であるとともに、映画やテレビドラマなどでも何度か観た経験のある人も非常に多いかと思うが、しかし、実際にその作品を本（書物）で読んでいる人たちは、意外に少ないのではないかと思う。そこで、今回も、本（書物）に書かれた「本文」を丁寧に読み辿りながら、江戸川乱歩の『屋根裏の散歩者』の、その「魅力」を探ってみたいと思う。

*

*

まず、本文の「冒頭」部分は、次のようなものである。「……多分それは一種の精神病でもあったのでしょう。郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、いっこうこの世が面白くないのです。学校を出てから、——その学校とても一年に何日と勘定できるほどしか出席しなかったのですが——彼にできそうな職業は、片っ端からやってみたのです。けれど、これこそ一生を捧げるに足ると思えるようなものには、まだひとつも出くわさないので。おそらく彼を満足させる職業などは、この世に存在しないのかもしれない。長くて一年、短いのは一と月ぐらい、彼は職業から職業へと転々としてきました。そして、とうとう見切りをつけたのか、今では、もう次の職業を探すでもなく、文字通り何もしないで、面白くもないその日その日を送っているのです。」

また、遊びの方もその通りでした。かるた、球突き、テニス、水泳、山登り、碁、将棋、さては各種の賭博に至るまで、とてもここには書き切れない程の、遊戯という遊戯は一つ残らず、娯楽百科全書という様な本まで買込んで、探し廻っては試みたのですが、職業同様、これはというものもなく、彼はいつも失望させられていました。だが、この世には「女」や「酒」という、どんな人間にだって一生涯飽きることのない、すばらしい快樂があるのではないか。諸君はきつとそう仰有るでしょうね。ところが、我が郷田三郎は、不思議とその二つのものに対しても興味を感じないのでした。酒は体質に適しないのか、一滴も飲めませんし、女の方は、無論その欲望がないわけではなく、相当遊びなどもやっているのですが、そうかと言って、これあるが為に生き甲斐を感じるといっては、どうしても思えないのです。——「……こんな面白くない世の中に生き長えているよりは、いっそ死んでしまった方がましだ」と、ともすれば、彼はそんなことを考えました。しかし、そんな彼にも、生命を惜しむ本能だけは備わっていたと見えて、二十五歳の今日が日まで「死ぬ」と言いながら、つい死切れずに生き長えているのです」とある。

さて、この「設定」は、江戸川乱歩には実に数多く出て来るものであり、例えば、『赤い部屋』という作品の中でも、「……私という人間は、不思議なほどこの世の中がつまらないのです。生きていることが、もう退屈で退屈でしようがないのです。そこで、終に見つけ出した遊戯とは、人殺しだったのです。私はその遊戯を発見してから今までに、百人に近い男や女や子供の命を、ただ退屈をまぎらす目的のためばかりに奪ってきたのです」と言う。もちろん、それは、直接的な「人殺し」ではなく、いわば間接的な「人殺し」であり、——例えば、交通事故の現場で、近くに病院はないかと尋ねられた時に、適切な「病院」ではなく、敢えて、故意に遠い加減な「病院」を教えて、その結果、負傷者が手遅れで亡くなってしまおうというようなことである。そのような話を次から次へと話して、最後は、今までの話は、すべて「うそ」だったという展開で終わるわけだが、しかし、そ

のように何もやることもなく「退屈」で、しかも何か面白いことはないかと飢えに飢えた「心の隙間」には、ふと「悪魔の囁き」が聞こえて来て、何らかの「犯罪的な行為」などに手を染めてしまうようなことは、意外に数多くあるのではないかと思う。

一、素人探偵明智

さて、彼（郷田三郎）は、二十五歳で、親許から月々の仕送りを受け取り、職業を離れても別に生活には困らなかつたのですが、一つにはそういう安心が、彼をこんな気まま者にしてしまったのかも知れません。そこで彼は、その仕送りの金によって、せめていくらかでも面白く暮すことに腐心をして、例えば、職業や遊戯と同じように、頻繁に宿所を換えて歩くことなどもその一つでした。彼は、少し大げさに言えば、東京中の下宿屋を、一軒残らず知っていました。一月か半月もいると、すぐに別の下宿屋へと住み換えるのです。無論、その間には、放浪者のように旅をして歩いたり、或いはまた、仙人のように山奥へ引つ込んで見たこともありましたが、でも、都会に住みなれた彼には、とても淋しい田舎に長くいることも出来ず、一寸旅に出たかと思うと、いつの間にか、都会のともし火に、雑沓に、引き寄せられるように、彼は東京へ帰って来るのでした。そして、その度毎に下宿を換えたことは言うまでもありません。

そして、彼（郷田三郎）が今度移り住むところは、東栄館という、新築したばかりの、まだ壁に湿り気のあるような、新しい下宿屋でした。——それでは、なぜ「新築の下宿屋」になるのだろうか？ それは、つまり、「古い屋根裏」というのは、ほこりや蜘蛛の巣あるいは淀んだ空気の臭いなど、その他、そのようなものが「身体」（衣服や手や足の裏）などにも付きまとうとともに、天井板なども、ぎしぎしめりめりと音を出して、とても「天井裏を散歩」して、気楽に楽しめるような環境ではないのである。そこで、真新しい「新築の屋根裏」であれば、そういう心配もなくなるとともに、そこで、新しい「楽しみ」を発見したという事にもなるのである。

ただ、その前に、なぜ、彼（郷田三郎）は、いわゆる「犯罪」に興味を持つようになったのか？ それは、あるカフェで偶然知り合った、素人探偵明智小五郎という人物と親しくなり、彼（明智）の、聡明らしい容貌や、話しっぷりや、身のこなしなどに、すっかり心惹かれてしまい、しばしば彼（明智）を訪ねたり、また、時には彼（明智）の方が三郎の下宿へ遊びに来るような仲になったのである。そして、彼（明智）から様々な「犯罪」についての「話」を聞くうちに、いわゆる「犯罪」というものに興味を持ちはじめ、自分からも「様々な犯罪」などに関する書物などを買い込んで、毎日毎日それを読み耽り、「……ああ、世の中には、まだこんな面白いことがあったのか！」という感じで、本来、世の中のすべての事柄に興味を感じなくなっていた人物であったが、事もあるうに、「犯罪」にだけは、いい知れぬ魅力を感じるようになったということである。

しかも、彼（郷田三郎）は、今度は「犯罪」のまね事を始め、犯罪嗜好者らしく、例えば、浅草の遊園地をはじめ、映画街の狭い路地などを好んで歩いたり、また、その辺の壁に矢の印を書いて廻ったり、金持ちらしい通行人を見かけると、スリにでもなった気で、そのあとを尾行してみたり、また、妙な暗号文を書いた紙きれを公園のベンチの板の間に挟んだり、さらに、例えば、労働者、乞食、学生、その他、特に「女装」が気に入り、町

をさまよい歩いては、男たちを翻弄するようなことを喜んでいたが、しかし、ものの三ヶ月もたつと、そのようなことには、やがて厭きてしまい、また、明智との交際も、だんだんと遠のいて行くのであった。……

二、屋根裏の散歩

さて、彼（郷田三郎）が、出来上がったばかりの「東栄館」へと待ちかねて移ったのは、明智との交際を結んでから、すでに一年以上もたつていた。それゆえ、彼（郷田三郎）は、例の「犯罪」のまね事などにも、ほとんど興味を失い、毎日毎日退屈な日々を送っていたのである。それでも、東栄館に移った当初は、新しい友達などができたりして、いくらか気は紛れていたが、しかし、人間という生き物は、なんでも同じような思想（考え）を同じような顔（表情）をして、同じような言葉で繰り返し繰り返し発し合っているのだらうか。一週間もたないうちに、彼はまたしても、底知れぬ倦怠の中に沈み込んでしまふのであった。そして、それから十日ほどたった、ある日のことである。

ある日、彼（郷田三郎）は、ふとある妙なことを思いついた。それは、彼の部屋は、二階にあつたが、一間ほどの「押入れ」があり、その「押入れ」は、ふつう上下二つに分かれていて、下には、例えば、数個の行李、その他などを納め、一方、上段には、布団などをのせるのがふつうかと思うが、その「布団」を畳んで入れるのではなく、むしろ拡げて敷き、そのまま寝られるような状態にしたのである。そうすれば、いちいち「布団」を取り出して、座敷の中央に敷く手間と、また、片付ける手間とが省かれ、寝たくなれば、そのまま上段に上がって寝ればよいという「考え方」である。むろん、この「考え方」が成立するためには、やはり「壁がひどく汚れていたり、蜘蛛の巣が張っていたりした」のでは、そこで寝る気にもならないものであり、それゆえ、どうしても真新しい「新築の下宿屋」という設定が、ここでも必要不可欠になって来るのである。

さて、そこで寝て見ると、予想以上に感じがよく、低い天井を眺める気持も、どこか異様な味わいがあり、また、隙間から洩れてくる糸のような電気の光を見てみると、自分が何か探偵小説の人物になったような気がしたり、また、それを細めにかけて、自分の部屋を、まるで泥棒が他人の部屋をでも覗くような気分にもなつて、興味深かつたとある。しかし、それも三日もすると、飽きてしまい、あちこち見たりさわったりしているうちに、ちようど頭の上の一枚の天井板が、釘を打ち忘れたのか、なんだか動くような感じで、手で突っぱって持ち上げてみると、動くが、なんとなく上からおさえつけているような手ごたえがあつたという。さては、大きな青大将でもいるのかと想像するが、それは、結局、石が置いてあり、天井板を動かしている内に、その石は落ちて来るが、それはよけて、ふと天井裏はどうなっているのかと覗いてみると、先ず眼につくのは、縦に長々と横たえられた、太い、曲がりくねった、大蛇のような棟木であり、明るいと言つても屋根裏のことで、そう遠くまでは見通しが利かないのと、それに、細長い下宿屋の建物ですから、実際長い棟木でもあつたのですが、それが向うの方は霞んで見える程、遠く遠く連なっているように思われるのです。そして、その棟木と直角にこれは大蛇の肋骨（あばら）に当たるたくさんの梁が、両側へ、屋根の傾斜に沿つてニヨキニヨキと突き出ています。それだけでもずいぶん雄大な景色ですが、その上、天井を支えるために、梁から無数の細い棒が下

っていて、それがまるで鐘乳洞の内部を見るような感じを起こさせる、それらの屋根裏を見廻しては、「……これはすてきだ」と、彼（郷田三郎）は思わずそう呟くのでした。病的な彼は、世間普通一般の興味には惹き付けられないで、むしろ人には下らなく見えるような、こうした事物に、却って、言い知れぬ魅力を感じるのであった。

そして、その日から、彼（郷田三郎）の「天井裏の散歩」が始まるのである。それは、夜となく昼となく、暇さえあれば、彼は泥棒猫のように足音を忍ばせて、棟木や梁の下を伝い歩くのであった。もちろん、新築で汚れる心配もなく、シャツ一枚になって、思うがままに跳梁し、時候もちょうど春で、さして暑くも寒くもなかったとある。これらは、やはり「天井裏を自由に散歩」できるための、どうしても「必要な条件」となるのだろう。しかも、その東栄館の建物は、中央の「庭」（つまり中庭）を囲むように、枱形に部屋が並んでいる作りであり、彼の部屋の天井裏から、グルッとひと廻りして、また、元の彼の部屋まで帰って来るようになっていた。そのような設定をして、次へと展開するのである。

そして、一度天井裏に上がってみると、何とも開放的で、誰の部屋の上を歩き廻ろうとも、まさに「自由自在」であり、しかも、もしその人にその気があれば、盗みを働くことさへできるのである。さらにまた、ここでは他人の秘密を隙見することなどは、もう「勝手次第」であり、新築とは言え、下宿屋の安普請ですから、天井には到る所に隙間があり、希には、節穴さえあるのです。そして、二十人に近い東栄館の二階じゅうの下宿人の秘密を、次から次へと隙見して歩く、そのことだけでも、もう十分愉快なのです。そして、久方ぶりで、彼は、生き甲斐というものを感じさえするのです。とある。

三、天井裏からの隙見

さて 彼（郷田三郎）の身支度は、やがて、さも本ものの犯罪人らしく装い、それは、ピツタリと身についた茶色の手織のシャツ、同じズボン下、また、足袋をはき、手袋をはめ、そして、手には懐中電灯を持つというスタイルであり、夜ともなく昼ともなく、こうして、彼は、有頂天になって、「天井裏の散歩」をつづけたのであった。

そして、天井からの隙見というものが、どれほど異様に興味のあるものだから、実際にやってみた人でなければ、恐らく、想像もできませんまい。たとえ、その下に別段の事件が起こっていないなくても、誰も見ているものがないと信じて、その本姓をさらけ出した人間というものを観察するだけでも、充分面白いのです。——ある人々は、そのそばに他人のいる時と、ひとり切りの時とでは、立居ふるまいはもろろん、その顔の「相好」（表情）まで、まるで変わるものだと発見して驚くとともに、ふだん横から見ているのとはまた違って、真上から見下ろすというのは、ずいぶん異様な景色に感じられるものである。

例えば、ふだん過激な反資本主義の議論を吐いている会社員が、誰も見ていない所では、貰ったばかりの昇給の辞令を、折靴から出したり、しまったりして、幾度も飽きずに眺めては喜んでいる光景とか、また、豪奢ぶりを示している或る相場師が、いざ床につく時には、昼間はさも無造作に着こなしていた着物を、まるで女のように丁寧に畳んだり、また、小さな汚れなどを見つけると、丹念に口で舐めて、クリーニングをしている光景とか、また、何々大学の野球の選手だとかいう青年が、運動家にも似合わない臆病さをもって、女中へのつけ文を、夕食後のお膳の上に、のせたり、引っ込めたり、モジモジと同じこと

を繰り返している光景とか、さらには、大胆にも、淫売婦風の女性などを引き入れては、すさまじいまでの狂態を演じている光景さへも、見ただけ見ることができるとは、

また、下宿人と下宿人との、感情の葛藤なども、非常に興味深いものであり、例えば、同じ人間が、相手によって、さまざまに態度をかえて行く有様、今の先まで、笑顔で話しかけていた相手を、隣りの部屋へきては、まるで不倶戴天ふくたいてんの仇かたきでもあるように罵ののしっている者もあれば、蝙蝠こうもりのように、どこへ行っても、都合のいいお座がくせいなりを言いって、陰かげでペロリと舌を出している者もあるのです。さらに、二階には一人の女画がくせい学生がくせいがいるが、それは、もう「三角関係」どころではありません。五角六角と、余りにも複雑になり過ぎた関係、それらが手に取るように見えるばかりか、競争者たちの誰も知らない本人の「真意」というものが、局外者の「屋根裏の散歩者」だけには、ハッキリとわかるのであった。

四、覗きとは

さて、それでは、その「覗き」という問題を考えてみたいと思うが、まず、「覗き」というのは、一体、何かと敢えて問えば、それは、まさにわれわれ人間の「好奇心」そのものに他ならないのである。しかも、それは、堂々と見るといよりは、むしろ「こっそりと見る」ということであり、それでは、なぜ「こっそりと見る」のだろうか？ それは、自分の存在を気づかれぬようにして、まさにできるだけ「対象」をそのまま（あるがまま）に見てみたいという「好奇心」に他ならないのである。

例えば、人間、動物、植物、自然、人工物、宇宙、その他、何であれ、まさにできるだけ対象をそのまま（あるがまま）に見てみたいという「好奇心」であり、その対象が「人間」であるような場合は、例えば、われわれ人間というのは、他人の前ではどうしても他人を意識した「姿」（言動）などになりやすい傾向があるかと思うが、それゆえ、そのような他人を全く意識しない、その人の、まさに素のまま（あるがまま）の「姿」（言動）などを見てみたいという、そういう「一つの欲求」でもあるということである。

また、女性の部屋をはじめ、女性の風呂場、トイレ、更衣室、その他、そのようなところへの「覗き」も、極めて多いかと思うが、それらに加えて、他人の部屋、ダンスや引出しの中、日記、手紙、写真、その他をはじめ、パソコン、ケータイ、スマートフォン、その他の中を覗いてみたり、また、何らかの「秘密の情報や極秘文書、その他」などを覗いてみたりと、その他、実に多種多様なものがあるかと思うが、それらを一言で言えば、ほんとうのことが知りたい、その「実体」（ほんとうのこと、ほんとうの姿、ほんとうの生なま態、ほんとうの事情、ほんとうの状況、ほんとうの心、その他）、ほんとうの何かを知りたいという、そういう「好奇心」でもあるということである。

*

*

そして、「覗き」という行為は、当然のことながら、「する」側と「される」側とに大別されるかと思うが、「する」側は、面白い、楽しい、興味深い、その他ということになるかと思うが、しかし、一方、「される」側は、いやだ、恥ずかしい、許せない、プライバシーの侵害だ、その他、そういうことになるのだろう。——これは、常に、一方には、「する」側と、もう一方には、「される」側とが同時に存在することになる。そして、一方の「する」側というのは、例えば、面白い、楽しいということになるのかも知れないが、

一方、「される側」は、例えば、いやだ、許せない、プライバシーの侵害だ、その他ということになるのだろう。このことは、徹底的に考えてみなければならぬことであり、「する側」は、よくても、「される側」は、それではたまったものではないのである。これは、すべての「犯罪行為」（或いは「不正行為」）などについて言えることである。

例えば、人を「殺す」方はよくても、「殺される」方はたまったものではない。また、「詐欺」する方はよくても、「詐欺」される方はたまったものではない。また、「恐喝」（罵倒）する方はよくても、「恐喝」（罵倒）される方はたまったものではない。また、「放火」する方はよくても、家に「放火」される方はたまったものではない。また、「横領」する方はよくても、「横領」される方はたまったものではない。また、「強姦」する方はよくても、「強姦」される方はたまったものではない。その他、それらは、すべて同じことである。——だからこそ、それらを「犯罪」（或いは「不正行為」）として罰するとう、そういう「法律（刑法）、その他」になっているのである。

五、ツルの恩返し

ところで、「覗き」という言葉を聞いて、誰もが「頭の中」（或いは「心の中」）にふと思ひ浮かべる「イメージ」の一つとしては、日本では余りにも有名な『鶴の恩返し』という昔話があるかと思うが、その「内容」は、次のようなものである。

*

*

むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある寒い冬の日、おじいさんは町へたぎぎを売りに出かけました。すると途中の田んぼの中で、一羽のツルがワナにかかっているのを見かけました。おじいさんは可哀想に思っ、ツルを助けてやりました。するとツルは、「カウ、カウ、カウ」と、鳴いて、飛んで行きました。

その夜、雪の降る中、戸を叩く音がしました。戸を開けると、娘が一人立っていて、道に迷い、行くあてもなく、一晩泊めてください、と頼むのであった。老夫婦は、喜んで娘を泊めてやりました。翌日から、娘は、せつせと食事の手伝いや掃除などをしました。何日も外の大雪は降り止まず、娘は、やがて、この家においてくださいと頼むのであった。

そして、ある日、娘は、機を織りたいので、糸を買って来てくださいと、おじいさんに頼みました。おじいさんは、町で糸を買ってくると、娘は、「機をおっている間は、決して中をのぞかないでください」と頼みました。三日後、娘は、美しい「布」（織物）を持って、外に出て来ました。娘は、この「布」（織物）を町に持って行って売り、帰りにはまた、糸を買って来て下さいと言うのであった。

娘は、再び、部屋で機を織りはじめ、三日後に、美しい「布」（織物）を持って、外に出て来ました。その「布」（織物）は、町では評判となり、高い値段で売れました。そして、また、娘は、部屋に閉じこもって機を織り始めると、おじいさんとおばあさんは、一体、どのように機を織っているのかという「好奇心」と、次第に痩せてきた娘を「心配」して、終に、覗いてはいけなと言われていた、その「部屋のなか」をそっと覗いてしまったのでした。すると、そこには、一人の娘ではなく、「……一羽のツルが長いくちばしで自分の羽毛を引き抜いては、糸にはさんで機をおっていた」のでした。娘は、「……わ

たしは、いつか助けられたツルでございます。正体を見られては、ここに留まることはできません。もうお別れです」と、おじいさんとおばあさんが止めるのも聞かず、娘は、一羽のツルとなって空高くへと舞い上がって行くのでした。……

*

*

さて、これが有名な『鶴の恩返し』であるが、これは、一体、何なのか？ それは、基本的には、まさに「因果応報」ということであり、「……善いことをすれば、善い結果がわが身に降りかかり、悪いことをすれば、悪い結果がわが身に降りかかる」ということである。——つまり、ツルを助けてやったからこそ、ツルは、その恩返しに来たのであり、一方、覗いてはいけないという約束を破ったから、ツルは、出て行ってしまったのである。また、浦島太郎は、いじめられていたカメを助けたからこそ、カメは、その恩返しに竜宮城へと連れて行くのであり、一方、開けてはいけないという玉手箱を開けてしまったからこそ、まさに「おじいさん」(厳しい現実の社会へと戻る) ことになるのである。

むろん、その他の「笠地蔵、花咲かじいさん、舌切りすずめ、その他」なども、基本的には、同じような「因果応報」に基づいた内容になっているかと思う。

一方、桃太郎というのは、ある日、おばあさんが川でせんたくをしていると、川上から大きな桃が一つどんぶらこどんぶらこと流れてきて、それを拾って家に持ち帰り、おじいさんと一緒に桃を割ろうとすると、突然、中から元気な赤ちゃんが飛び出して来る。子供のなかった老夫婦は、その子を「桃太郎」と名付けて大事に育てるのでした。やがて、大きくなると、桃太郎は、鬼退治を思い立ちますが、それは、鬼は人の物を盗んだりして迷惑をかけていた存在であり、その「鬼退治」に行く日、おばあさんは、日本一のきみだんごを作って持たせませす。そして、その「鬼退治」に行く途中で、まず、イヌが現われて、お腰の「きみだんご」を一つくださいなと言ひ、そこで、桃太郎は、イヌにきみだんごを一つあげると、そのイヌは、一緒について来る。次に、サルが現われ、最後は、キジが現われて、同じようにきみだんごをもらって、一緒について来る。これは、一体、何なのかと問えば、それは、まさに「鬼退治ときみだんご」とを媒介としての、いわば「人間関係」の最も基本的な形なのである。

例えば、「会社」と「社員」との関係は、一方の「社員」の方は、会社の仕事を誠実に遂行し、それに対して、一方の「会社側」の方は、その「報酬」(見返り)として「給料」(お金)を支払うという関係である。——さて、船で「鬼ヶ島」へと到着して、大きなくろがねの門の前に立つと、まず、キジが鬼の様子を空から見まわり、また、サルは高い門をよじ登って行き、門のかんぬきを抜き、そして、イヌと桃太郎は、門を押し開けて、中に入ると、多くの鬼たちが襲って来ます。しかし、日本一のきみ団子を食べて百人力になつていたイヌ、サル、キジ、桃太郎たちは、多くの鬼たちをこらしめ、ついに降参させます。そして、盗まれた宝物などを持って、村へと帰ってくるという話であります。これはもちろん、まさに「勸善懲悪」であるが、それでは、なぜわれわれ人間は、このような「勸善懲悪」を好むのだろうか？ それは、われわれ人間の「知性や理性」というものが、まさにそういうものを好む特徴(性質)を持っているからである。

そして、その「……善いことをすれば、善い結果がわが身に降りかかり、悪いことをすれば、悪い結果がわが身に降りかかる」という「考え方」は、一体、どこから生じて来るのかと敢えて問えば、それはもちろん、われわれ人間の「理知的部分」(それは「知性+

理性十母体のようなもの」から成るもの)ではあるが、その最も「根源」そのものは、まさに「母体のようなもの」(その内に宿る「善のDNA」)からということになるのだらう。……

六、完全犯罪への誘惑 其の一

さて、或る夜ふけのこと、三郎は、いつものように「散歩」を一巡して、自分の部屋へと帰るために、梁から梁を伝わっていたが、彼の部屋とは、庭を隔てて、ちょうど向かい側の棟の、一方の隅の天井に、ふと、かすかな隙間(明かり)を発見する。それは、かなり大きな「木の節」で、半分以上板から離れて、ちよつとこじ開ければ、なんなく離れそうなので、三郎は外の隙間から下を見て、部屋の人が寝ていることを確かめた上で、音のしないように注意しながら、長い間かかつて、とうとうそれをはがしてしまいました。都合のいいことには、はがした後の節穴が、杯形に下側が狭くなっていますので、その木の節を元通りつめてさえ置けば、下へ落ちるようなことはなく、そこにこんな大きな覗き穴があるのを、誰にも気附かれずに済むのです。

そして、その節穴から下を覗いてみると、偶然にも、東栄館のなかでも、いちばん虫の好かぬ、遠藤という歯科学校卒業生で、今はどこかの歯医者の手をしている男の部屋であり、その江藤が、のつぺりとした顔で、すぐ目の下に寝ているのでした。ばかに几帳面と見えて、部屋の中は、すべてキッチンと整頓されている。例えば、机の上の文房具の位置、本箱の中の書物の並べ方、蒲団の敷き方、枕許に置き並べた、舶来物でもあるのか、見なれぬ形の目醒時計、漆器の巻煙草入れ、色硝子の灰皿、いずれを見ても、それらの品物の主人公が、世にも綺麗好きな、重箱の隅を楊子でほじくる様な神経家であることを証拠立てている。また遠藤自身の寝姿も、実に行儀がいいのです。ただ、それらの光景にそぐわぬのは、彼が大きな口をあけて、雷のようないびきをかいていることでした。

三郎は、何か汚いものでも見るように、眉をしかめて、遠藤の寝顔を眺めました。彼の顔は、綺麗と言えば綺麗です。成程彼自身で吹聴する通り、女などには好かれる顔かも知れません。しかし、何という間延びな、長々とした顔の造作でしょう。濃い頭髪、顔全体が長い割には、変に狭い富士額、短い眉、細い目、始終笑っている様な目尻の皺、長い鼻、そして異様に大ぶりな口。三郎はこの口がどうにも気に入らないのでした。そして、肥厚性鼻炎でもあるのか、始終鼻を詰らせ、その大きな口をポカンと開けて呼吸をしているのです。寝ていて、鼾をかくのも、やつぱり鼻の病気のせいなのでしょう。

三郎は、いつでもこの遠藤の顔を見さえすれば、何だかこう背中がムズムズして来て、彼ののつぺりした頬つぺたを、いきなり殴りつけてやりたい様な気持になるのでした。

そうして、遠藤の寝顔を見ているうちに、三郎はふと妙なことを考えました。それは、その節穴から唾を吐けば、丁度遠藤の大きく開いた口の中へ、うまく入りはしないかということでした。なぜなら、彼の口は、まるで詠えでもしたように、節穴の真下の所にあったからです。三郎は物好きにも、股引の下にはいていた猿股の紐を抜き出して、それを節穴の上に垂直に垂らし、片目を紐にくっつけて、丁度銃の照準でも定めるように、試して見ますと、不思議な偶然です。紐と節穴と遠藤の口とが、全く一点に見えるのです。つまり節穴から唾を吐けば、必ず彼の口へ落ちるに相違ないことが分かったのです。

しかし、まさかほんとうに唾を吐くわけにも行きませんので、三郎は、節穴を元の通りに埋めて置いて、立ち去ろうとしましたが、その時、不意にチラリと、ある恐ろしい考えが彼の頭に閃きました。彼は思わず、屋根裏の暗闇の中で、まっ青になって、ブルブルと震えました。それは実に、何の恨みもない遠藤を殺害するという考えだったのです。

彼は遠藤に対して何の恨みもないばかりか、まだ知り合いになってから、半月も経ってはいないのです。それも偶然二人の引越しが同じ日だったので、それを縁に、二、三度部屋を訪ね合った程度で別に深い交渉があるわけではないのです。では、なぜその遠藤を殺そうなどと考えたかと言いますと、今も言うように、彼の容貌や言動が殴りつけたい程虫が好かぬということも、多少は手伝っていましたが、三郎のこの「考え」の主たる動機は、相手の人物にあるのではなく、ただ「殺人行為」そのものの興味にあったのです。先からお話して来た通り、彼（郷田三郎）という人の精神状態は、非常に変態的で、犯罪嗜好癖ともいふべき病気を持っていて、その犯罪の中でも彼が最も魅力を感じるの「殺人」なのです。ですから、こうした「考え」の起こるのも決して偶然ではないのです。ただ今までは、たとえ屢々殺意が生ずることがあっても、罪の発覚を恐れて、一度も実行しようなどと思つたことがなかっただけなのです。

ところが、今遠藤の場合は、全然疑いを受けないで、発覚の憂いもなく、殺人が行なわれそうに思われのです。わが身に危険さえなければ、たとえ相手が見ず知らずの人間であらうと、三郎はそんなことを顧慮する（考慮に入れる）ことはないのです。むしろ、その殺人行為が残虐であればあるほど、彼の異常な慾望は、一層満足させられるのでした。それでは、なぜ遠藤に限って、殺人が発覚しない——少くとも三郎がそう信じていたか——と言いますと、それには、次のような事情があつたのです。

六、完全犯罪への誘惑 其の二

それは、東栄館へ引越して四、五日たった時分でした。三郎は懇意になつたばかりの、ある同宿者と、近所のカフェへ出掛けたことがあり、その時、同じカフェに遠藤も来ていて、三人がひとつテーブルに寄つて酒を（もつとも酒の嫌いな三郎はコーヒードでしたけれど）飲んだりして、三人とも大分いい心持になって、連れ立って下宿へ帰つたのですが、少しの酒に酔っぱらつた遠藤は、「……まあ僕の部屋へ来て下さい」と無理に二人を彼の部屋へ引っぱり込みました。遠藤は独りではしゃいで、夜が更けているのも構わず、女中を呼んでお茶を入れさせたりして、カフェから持ち越しののろけ話を繰り返すのでした。——三郎が彼を嫌い出したのは、その晩からです。その時、遠藤は、真赤に充血した唇をペロペロと舐めまわしながら、さも得意らしくこんなことを言うのでした。

「……その女とですね、僕は一度情死をしかけたことがあるのですよ。まだ学校にいた頃ですが、ほら、僕のは医学校でしょう。薬を手に入れるのはわけないんです。で、二人が楽に死ぬだけのモルヒネを用意して、聞いて下さい、塩原へ出かけたもんです」

そう言いながら、彼はフラフラと立ち上がって、押入れの前に行き、ガタガタ襖を開けると、中に積んであつた一つの行李の底から、ごく小さい、小指の先ほどの、茶色の瓶を探して来て、聴き手の方へ差し出すのでした。瓶の中には、底の方にホンのぼつちり、何かキラキラと光った粉が入っているのです。

「……これですよ。これっぽっちで、充分二人の人間が死ぬるのですからね。……しかし、あなた方、こんなことしゃべっちゃいやですよ。ほかの人に」

そして、彼ののろけ話は、さらに長々と、止めどもなく続いたことですが、三郎は今、その時の毒薬のことを、計らずも思い出したので。「……天井の節穴から、毒薬を垂らして、人殺しをする！ まあ何という奇想天外な、すばらしい犯罪だろう」と。

彼は、この妙案に、すっかり有頂天になってしまいました。よく考えて見れば、その方は、如何にもドラマティックなだけ、可能性には乏しいものだということが分るのですが、そしてまた、何もこんな手数のかかることをしないで、ほかにいくらかも簡便な殺人法があったはずですが、異常な思いつきに幻惑させられた彼は、何を考える余裕もありませんでした。そして、彼の頭には、ただもうこの計画についての都合のいい理窟ばかりが、次から次へと浮かんで来るのです。

先ず薬を盗み出す必要がありました。が、それは訳のないことでした。遠藤の部屋を訪ねて話し込んでいれば、そのうちには、便所へ立つとか何とか、彼が席を外すこともあるでしょう。その暇に、見覚えのある行李から、茶色の小瓶を取り出しさえすればいいのです。遠藤は、始終その行李の底を検べているわけではないのですから、二日や三日で気の付くこともありますまい。たとえまた気づかれたところで、そんな毒薬を持つていることがすでに違法なのですから、表沙汰になるはずもなく、それに、上手にやりさえすれば、誰が盗んだのかも分かりはしません。

そんなことをしないで、天井から忍び込む方が楽ではないのか？ いやいや、それは危険です。先にも言うように、いつ部屋の主が帰って来るか知れませんが、硝子障子の外から見られる心配もあります。第一、遠藤の部屋の天井には、三郎の室のように、石ころで重しをした、あの抜け道がないのです。どうしてどうして、釘づけになっている天井板をはがして忍び入るなんて危険なことが出来るのですか。

さて、こうして手に入れた粉薬を、水に溶かして、鼻の病気のために始終ひらきっぱなしの、遠藤の大きな口へ垂らし込めば、それでいいのです。ただ心配なのは、うまく呑み込んでくれるかどうかという点ですが、なに、それも大丈夫です。なぜと言って、薬がごく少量で、溶き方を濃くして置けば、ほんの数滴で足りるのですから、熟睡している時なら、気も付かないくらいでしょう。また、気がついたにしても、恐らく吐き出す暇なんかありません。それから、モルヒネが苦い薬だということも、三郎はよく知っていました。が、たとえ苦くとも分量がわずかで、なおその上に砂糖でも混ぜて置けば、万々失敗する気遣いはありません、誰にしても、まさか天井から毒薬が降って来ようなどとは想像もしないでしょうから、遠藤が、咄嗟の場合、そこへ気のつくはずはないのです。

しかし、薬がうまく利くかどうか、遠藤の体質に対して、多過ぎるか或いは少な過ぎるかして、ただ苦悶するだけで死に切らないというようなことはあるまいか。これが問題です。なるほど、そんなことになれば非常に残念ではありますが、でも、三郎の身に危険を及ぼす心配はないのです。というのは、節穴は元通り蓋をしてしまいますし、天井裏にも、そこにはまだ埃など溜っていない。ですから、何の痕跡も残りません。指紋は手袋で防いであります。たとえ天井から毒薬を垂らしたことが分っても、誰の仕業だか知れるはずはありません。ことに彼と遠藤とは、昨今の交際で、恨みを含むような間柄でないことは、周知の事実なのです。だから、彼に嫌疑のかかる道理がないのです。いや、そうまで考えなく

でも熟睡中の遠藤に、薬の落ちて来た方角などが、分かるものではありません。

これが、三郎の屋根裏で、また部屋へ帰ってから、考え出した虫のいい理窟でした。読者はすでに、たとえ以上の諸点がうまく行くとしても、そのほかに一つの重大な錯誤（誤り）のあることに気づかれたことと思います。が、彼はいよいよ実行に着手するまで、不思議にも、少しもそこへ気がつかないのです。

七、薬の入手と毒薬の調査

さて、三郎が、都合のよい折を見計らって、遠藤の部屋を訪問したのは、それから四、五日たった時分でした。むろん、その間には、彼はこの計画について、繰り返し繰り返し考えた上、大丈夫危険がないと見極めをつけることが出来たのです。のみならず、色々と新しい工夫をつけ加えもしました。例えば、毒薬の瓶の始末についての考案もそれです。

若しうまく遠藤を殺害することが出来たならば、彼はその瓶を、節穴から下へ落して置くことに決めました。そうすることによって、彼は二重の利益が得られます。一方では、若し発見されれば、重大な手掛りになる所のその瓶を、隠匿する世話がなくなることで、他方では、死人の側に毒物の容器が落ちていれば、誰しも遠藤が自殺したのだと考えるに相違ないこと、そして、その瓶が遠藤自身の品であるということは、いつか三郎と一緒に彼ののろけ話を聞かされた男が、うまく証明してくれるに違いないのです。なお都合のよいのは、遠藤は毎晩、キチンと締りをして寝ることでした。入口はもちろん、窓にも、中から金具で止めをしてあって、外部からは絶対に入れないことでした。

さて、その日、三郎は非常な忍耐力を以て、顔を見てさえ虫唾の走る遠藤と、長い間雑談を交えました。話の間に、屢々それとなく、殺意をほめかして、相手を怖がらせてやりたいという、危険極まる慾望が起こつて来るのを、彼はやつのことで喰い止めました。「……近いうちに、ちつとも証拠の残らないような方法で、お前を殺してやるのだぞ、お前がそうして、女のようにベチャクチャしゃべれるのも、もう長いことではないのだ。今のうち、せいぜいしゃべり溜めて置くがいいよ」と、三郎は、相手の止めどもなく動く、大ぶりの唇を眺めながら、心の内でそんなことを繰り返していました。この男が、間もなく、青ぶくれの死骸になってしまうのかと思うと、彼はもう愉快でたまらないのです。

そうして話し込んでいるうちに、案の定、遠藤が便所に立って行きました。それはもう、夜の十時頃でもあったでしょうが、三郎は抜目なくあたりに気を配って、ガラス窓のそとなども十分調べた上、音のしないように、しかし手早く押入れを開けて、行李の中から例の薬瓶を探し出しました。いつか入れ場所をよく見ておいたので、探すのに骨は折れません。でも、さすがに胸がドキドキして、脇の下からは冷汗が流れました。実を言うと、彼の今度の計画のうち、一番危険なのはこの毒薬を盗み出す仕事でした。どうしたことで遠藤が不意に帰って来るかも知れませんし、また、誰かが隙見をしていないとも限らぬのです。が、それについては、彼はこんな風に考えていました。若し見つかったら、或いは見つからなくても、遠藤が薬瓶のなくなったことを発見したら——それはよく注意していればじき分かることです。殊に彼には天井の隙見という武器があるのですから——殺害を思い止まりさえすればいいのです。ただ毒薬を盗んだというだけでは、大した罪にもなりませんからね。

それはともかく、結局彼は、先ず誰にも見つからずに、うまうまと薬瓶びんを手に入れることが出来たのです。そこで、遠藤が便所から帰って来ると間もなく、それとなく話を切り上げて、彼は自分の部屋へ帰りました。そして、窓には隙間なくカーテンを引き、入口の戸には締りをして置いて机の前に坐ると、胸を躍らせながら、懐中から可愛らしい茶色の瓶びんを取り出して、さてつくづく眺めるのでした。(MORPHINE)

多分遠藤が書いたのでしょう。小さいレットテルにはこんな文字が記してあります。彼は以前に薬物学の書物を読んで、モルヒネのことは多少知っていましたけれど、実物にお眼めにかかるとは今は始めてでした。多分それは塩酸モルヒネというものなのでしょう。瓶びんを電燈の前に持つて行って、透かしてみますと、小匙さしに半分もあるかなしの、ごく僅かの白い粉が、綺麗きれいに透いて見えています。一体、こんなもので人間が死ぬのかしら、と不思議に思われるほどでした。

三郎は、むろん、それをはかるような精密な秤はかりを持っていないので、分量の点は遠藤の言葉を信用しておく外はありませんでしたが、あの時の遠藤の態度口調は、酒に酔っていたとは言え決して出鱈目でたらめとは思われません。それにレットテルの数字も、三郎の知っている致死量の、丁度二倍ほどなのですから、よもや間違いはありませんまい。

そこで、彼は瓶びんを机の上に置いて、そばに用意の砂糖やアルコールの瓶びんを並べ、薬剤師のような綿密さで、熱心に調査を始めるのでした。下宿人たちはもう皆寝てしまったと見えて、あたりは森閑しんかんと静まり返っています。その中で、マッチの棒に浸したアルコールを、用意深く、一滴一滴と、瓶びんの中へ垂らしていますと、自分自身の呼吸が、悪魔のため息のように、変に物凄ものまじく響くのです。それがまあ、どんなに三郎の変態的な嗜好を満足させたことでしょうか。ともすれば、彼の目の前に浮かんで来るのは、暗やみの洞窟どうくつの中で、ふつふつと泡立あわだち煮える毒薬の鍋なべを見つめて、ニタリニタリと笑っている、あの古い物語の恐ろしい妖婆ようばの姿でした。

しかしながら、一方においては、その頃から、これまで少しも予期しなかった、ある恐怖に似た感情が、彼の心の片隅かたすみに湧き出していました。そして時間の経つにしたがって、少しずつ少しずつ、それが拡がって来るのです。——誰かの引用で覚えていた、あのシェークスピアの不気味な文句が、眼もくらめくような光を放って、彼の脳髓のうずいに焼きつくのです。この計画には、絶対に破綻はたんがないと、かくまで信じながらも、刻々に増大して来る不安を、彼はどうすることも出来ないのです。

何の恨みもない一人の間人を、ただ殺人の面白さに殺してしまうとは、それが正気の沙汰か。お前は悪魔に魅入みいられたのか、お前は気が違ったのか。いったいお前は、自分自身の心を空恐ろしくは思わないのか。長い間、夜の更けるのも知らないで、調べてしまった毒薬の瓶びんを前にして、彼は物思いに耽びっていました。一層この計画を思い留まることにしよう。幾度そう決心しかけたか知れません。でも、結局は彼はどうしても、あの人殺しの魅力魅力を断念する気にはなれないのでした。

ところが、そうしてあれこれと考えているうちに、ハッと、ある致命的な事実が、彼の頭に閃ひらめきました。「ウフフフ………」と、突然三郎は、おかしくて堪たまないように、しかし寝静しずまったあたりに気を兼ねながら、笑い出したのです。「……馬鹿野郎ばかやろう。お前は何とよく出来た道化役者だ！ 大真面目おまじめでこんな計画を目論もくろむなんて。もうお前の麻痺まひした頭には、偶然と必然の区別さえつかなくなつたのか。あの遠藤の大きく開いた口が、一度、

例の節穴の真下にあったからと言って、その次にも同じようにそこにあるということが、どうして分かるのだ。いやむしろ、そんなことは先ずあり得ないではないか」と。

それは実に滑稽極まる錯誤（誤り）でした。彼のこの計画は、すでにその出発点において、一大迷妄に陥っていたのです。しかし、それにしても、彼はどうしてこんな分かり切ったことを今まで気づかずにいたのでしょうか。実に不思議と言わねばなりません。恐らくこれは、さも利口ぶっている彼の頭脳に、非常な欠陥があった証拠ではありますまいか。それはともかく、彼はこの発見によって、一方では甚しく失望しましたけれど、同時に他の一方では、不思議な気安さを感じるのでした。「……お蔭でおれはもう、恐ろしい殺人罪を犯さなくても済むのだ。ヤレヤレ助かった」と。

そうは言うものの、その翌日から、「屋根裏の散歩」をするたびに、彼は未練らしく例の節穴を開けて、遠藤の動静をさぐることを怠りませんでした。それは一つは、毒薬を盗み出したことを遠藤が勘づきはしないかという心配からでもありましたけれど、しかしまた、どうかしてこの間のように、彼の口が節穴の真下へ来ないかと、その偶然を待ちこがれていなかったとは言えません。現に彼は、いつの「散歩」の場合にも、シャツのポケットからあの毒薬を離れたことはないのです。

七、完全犯罪への誘惑（その要旨）

さて、或る夜ふけのこと、三郎は、いつものように「散歩」を一巡して、自分の部屋へと帰るために、梁から梁を伝わっていたが、彼の部屋とは、庭を隔てて、ちょうど向かい側の棟の、一方の隅の天井に、ふと、かすかな隙間（明かり）を発見する。それは、かなり大きな「木の節」で、半分以上板から離れて、ちよつとこじ開ければ、なんなく離れそうなので、三郎は、部屋の人が寝ていることを確かめた上で、音がしないようにそれをそうつとはがし、また、それを元にもどせば、節穴がふさがりような状態にしたのでした。

そして、その節穴から下を覗いてみると、偶然にも、東栄館のなかでも、いちばん虫の好かぬ、遠藤という歯科学校卒業生で、今はどこかの歯医者の手をしている男の部屋であり、その江藤が、のつぺりとした顔で、すぐ目の下に寝ているのでした。ばかに几帳面と見えて、部屋の中は、すべてキッチンと整頓されている。ただ、それにふさわしくないのは、大きな口をあけて、雷のようないびきをかいていること。その寝顔を見ているうちに、ふと妙なことを思いつき、そこで、猿股のひもを抜き出して、それを節穴の上から垂らすと、ちょうど遠藤の口のところに当たるのでした。三郎は、節穴を塞いで、立ち去ろうとしたが、その時、ふと「恐ろしい考え」が閃くのであった。それは、何の恨みもない遠藤を殺害するというものであり、自分でもぞつとして身震いするのであった。

ただ、彼（郷田三郎）という人は、非常に変態的で、犯罪嗜好癖ともいふべき病気を持っていて、その犯罪の中でも彼が最も魅力を感じるの「殺人」であり、しかも、絶対に犯行がバレないような「完全犯罪」ともなれば、ならさることなのである。

それは、東栄館へ引越して四、五日たった頃、三郎は、ある同居人と近くのカフェに行くとき、そこに遠藤も来ていて、そこで三人で酒（三郎は嫌いで飲まず）やコーヒを飲んだ後、三人で東栄館へと戻るが、その時、酒に酔っていた遠藤は、自分の部屋へと二人を誘い、そして、酒に酔った勢いで、自分は、実は「ある女性と情死しかけたことがある」

と言ひ、そして、押入れの「行李」の中から、その時に使い残したモルヒネの「小さな瓶」を見せるのであった。そのことを想い出した三郎は、その「モルヒネ」を使って、天井からその「毒薬」を垂らせば、まさに「完全犯罪」も可能だと考えるのであった。

そこで、四、五日後、彼（郷田三郎）は、遠藤の部屋を訪ねては、遠藤が便所へと行くチャンスをはたすら狙ひ、ようやく、夜の十時頃、便所に立った後、すぐに押入れの「行李」の中から、例のモルヒネの入った「小さな瓶」をまんまと手に入れては、自分の部屋へと帰って来るのであった。そして、深夜、孤独、そのモルヒネの「小さな瓶」の中に砂糖少量とマツチ棒に浸したアルコールを一滴一滴と垂らして調査し、まさに「毒薬」を作り出したのであった。ところが、ふと自分の「計画」にある決定的な「ミス」（欠陥）があることに気づくのであるが、それは、この前は、偶然にも天井の「節穴」の真下に遠藤の「口」があったが、いつもそのような状態になるはずもなく、自分の愚かさに気づいて、非常に失望したり、また、これで殺人罪を犯さずにすんだと安堵したりするが、しかし、彼はなお未練たらしく、例の節穴をあけては、遠藤の様子をチェックすることを怠らなかつただけではなく、いつか前と全く同じような状態になることを心密かに願っていたのである。

八、犯罪の遂行

ある夜のこと——それは三郎が「屋根裏の散歩」を始めてからもう十日ほどもたつていました。十日の間も、少しも気づかれることなしに、毎日何回となく、屋根裏を這い廻つていた彼の苦心は、ひと通りではありません。綿密なる注意、そんなありふれた言葉では、とても言い表わせられないようなものでした。——三郎はまたしても遠藤の部屋の天井裏をうろついていました。そして、何かおみくじでも引くような心持で、吉か凶か、今日こそは、ひよつとしたら吉ではないかな。どうか吉が出てくれますようにと、神に念じさえしながら、例の節穴を開けて見るのでした。

すると、ああ、彼の眼がどうかしていたのではないのでしょうか。いつか見た時と寸分違わない恰好で、そこに軒をかかっている遠藤の口が、ちょうど節穴の真下へきていたではありませんか。三郎は、何度も目をこすつて見直し、また猿股の紐を抜いて、目測さえして見ましたが、もう間違いはありません。その「紐と穴と口」とが、まさしく一直線上にあるのです。彼は思わず叫び声を上げそうになるのを、やっと堪えました。遂にその時が来た喜びと、一方では言い知れぬ恐怖と、その二つが交錯した、一種異様の興奮のために、彼は暗やみの中で、真つ青になってしまいました。

彼はポケットから、毒薬の瓶を取り出すと、独りでに震え出す手先を、じつとためながら、その栓を抜き、紐で見当をつけておいて——おお、その時の何とも形容の出来ない心持！——ポトリ、ポトリ、ポトリと数滴。それがやつとでした。彼はすぐさま目を閉じてしまったのです。「……気がついたか、きつと気がついた。きつと気がついた。そして、今にも、おお、今にもどんな大声で叫び出すことだろう」と、彼はもし両手があいていたら、耳をもふさぎたいほどに思いました。

ところが、彼のそれほどの気遣いにもかかわらず、下の遠藤はウンともスンとも言わないのです。毒薬が口の中へ落ちたところは確かに見たのですから、それに間違いはありません。でも、この静けさはどうしたのでしょうか。三郎は恐る恐る目をひらいて、節

穴を覗いて見ました。すると、遠藤は、口をムニヤムニヤさせ、両手で唇をこするような恰好をして、ちやうどそれが終わった所なのでしょう。またもやグーグーと寝入ってしまうのでした。案ずるよりは産むがやすいとはよく言ったものです。寝呆けた遠藤は、恐ろしい毒薬を飲み込んだことを少しも気づかないのでした。

三郎は、可哀そうな被害者の顔を、身動きもしないで、食い入るように見つめていました。それがどれほど長く感じられたか、事実は、二十分とはたっていないのに、彼には二、三時間もそうしていたように思われたことです。するとその時、遠藤はフツと目をひらきました。そして、半身を起こして、さも不思議そうに部屋の中を見廻しています。目まいでもするのか、首を振ってみたり、目をこすってみたり、うわごとのような意味のないことをブツブツとつぶやいてみたり、いろいろ気違いめいた仕草をして、それでも、やっとまた枕につきましたが、今度は盛んに寝返りを打つのです。

やがて、寝返りの力がだんだん弱くなって行き、もう身動きをしなくなつたかと思うと、その代りに、雷のような鼾声いびきが響き始めました。見ると、顔の色がまるで酒にでも酔つたように、真っ赤になつて、鼻の頭や額には、玉の汗がふつふつとふき出しています。熟睡している彼の身内で、今、世にも恐ろしい生死の争闘が行なわれているのかも知れません。それを思うと身の毛がよだつようです。

さて、しばらくすると、さしも赤かつた顔色が、徐々にさめて、紙のように白くなつたかと思うと、見る見る青藍色せいらんしよくに変つて行きます。そして、いつの間にか鼾いびきがやんで、どうやら、吸う息、吐く息の度数が減つてきました。……ふと胸のところ動かなくなつたので、いよいよ最期かと思つていきますと、暫くして、思い出したように、また唇がビクビクして、鈍い呼吸が帰つて来たりします。そんなことが二、三度繰り返されて、それでおしまいでした。……もう彼は動かないのです。グツタリと枕をはずした顔に、われわれの世界とはまるで別な一種のほほえみが浮かんでいます。彼はついに、いわゆる「仏」になつてしまつたのでしよう。

息をつめ、手に汗を握つて、その様子を見つめていた三郎は、はじめてホツとため息をつきました。とうとう彼は殺人者になつてしまつたのです。それにしても、何という楽々とした死に方だつたでしょう。彼の犠牲者は、叫び声ひとつ立てるでなく、苦悶くもんの表情さえ浮かべないで、鼾いびきをかきながら死んで行つたのです。「……なあんだ。人殺しなんてこんなあつけないものか」と、三郎は何だかガツカリしてしまいました。想像の世界では、もうこの上もない魅力であつた殺人ということが、やつて見れば、ほかの日常茶飯事と何の変わりもないのでした。このあんばいなら、まだ何人だつて殺せるぞ。そんなことを考える一方では、しかし、気抜けのした彼の心を、何とも得体の知れぬ恐ろしさが、ジワジワと襲い始めていました。

節穴から死体を見つめて自分の姿を、三郎は俄かに君悪くなつてきました。妙に首筋の所がゾクゾクして、ふと耳をすますと、どこかで、ゆっくりゆっくり、自分の名を呼び続けているような気さえます。思はず節穴から目を離して、暗やみの中を見廻しても、久しく明るい部屋を覗いていたせいでしょう。眼の前には、大きいや小さいのや、黄色い環わのようなものが、次々に現われては消えていきます。じつと見えていますと、その環わのうしろから、遠藤の異様に大きな唇が、ヒョイと出てきそうにも思われるのです。

*

*

でも彼は、最初計画したことだけは、先ず間違ひなく実行しました。節穴から薬瓶——その中にはまだ数滴の毒液が残っていたのです——を抛り落とすこと、その跡の穴をふさぐこと、万一天井裏に何かの痕跡が残っていないか、懐中電燈を点じて調べることに、そして、もうこれで手落ちがないと分かると、彼は大急ぎで梁を伝つて、自分の部屋へ引つ返したのでした。「……いよいよこれで済んだ」と、頭もからだも、妙に痺れて、何かしら物忘れでもしているような不安な気持を、強いて引き立てるようにして、彼は押入れの中で着物を着はじめました。が、その時ふと気がついたのは、例の目測に使用した猿股の紐を、どうしたかということだ。ひよつとしたら、あそこへ忘れてきたのではあるまいか。そう思うと、彼はあわただしく腰のあたりを探ってみました。どうも無いようです。彼はますます慌てて、体じゅうを調べました。すると、どうしてこんなことを忘れていたのでしょうか。それはちやんとシャツのポケットに入れてあったではありませんか。やれやれよかつたど、ひと安心して、ポケットの中から、その紐と懐中電燈とを取り出そうとしますと、ハツと驚いたことには、その中にまだほかの品物が入っていたのです。……毒薬の瓶の小さなコルクの栓が入っていたのです。

彼は、さつき毒薬を垂らす時、あとで見失つては大へんだと思つて、その栓をわざわざポケットへしまつて置いたのですが、それをど忘れしてしまつて瓶だけ下へ落してきたものと見えます。小さなものですけれど、このままにして置いては、犯罪発覚のもとです。彼はおびえる心を励まして、再び現場へ取つて返し、それを節穴から落としてこなければなりませんでした。

その夜、三郎が床についたのは——もうその頃は、用心のために押入れで寝ることはやめていました——午前三時頃でした。それでも、興奮しきつた彼は、なかなか寝つかれないのです。あんな栓を落とすのを忘れてくるほどでは、ほかにも何か手抜きがあつたかも知れない。そう思うと、彼はもう気が気ではないのです。そこで、乱れた頭を強いて落ちつけるようにして、その晩の行動を順序を追つて一つ一つ思い出して行き、どつかに手抜きがなかつたかと調べてみましたが、少なくとも彼の頭では、何事も発見できないのです。彼の犯罪には、どう考えて見ても、寸分の手落ちもないのです。

彼はそうして、とうとう夜の明けるまで考え続けていましたが、やがて、早起きの下宿人たちが、洗面所へ通うために廊下を歩く足音が聞えだすと、つと立ち上がつて、いきなり外出の用意を始めるのでした。彼は遠藤の死骸が発見される時を恐れていたのです。その時、どんな態度をとつたらいいのでしょうか。ひよつとしたら、後になつて疑われるような、妙な挙動があつては大へんです。そこで彼は、そのあいだ外出しているのが一番安全だと考えたのですが、しかし、朝飯もたべないで外出するのは、いっそう変ではないでしょうか。「……ああ、そうだつて、何をうっかりしているのだ」と、そこへ気がつくくと、彼はまたもや寢床の中へもぐり込むのでした。

それから朝飯までの二時間ばかりを、三郎はどんなにビクビクして過ごしたことでしようか、幸いにも、彼が大急ぎで食事をすませて、下宿屋を逃げ出すまでは、何事も起こらないで済みました。そうして下宿を出ると、彼はどこかという当てもなく、ただ時間をつぶすために、町から町へとさまよい歩くのでした。

八、犯罪の遂行（その要旨）

それは、ある夜のこと、三郎は、またしても遠藤の部屋の屋根裏をうろついでいて、今日こそは、どうか吉が出てくれますようにと、神に念じさえしながら、例の節穴をあけてみると、何とか見た時と全く同じような状態になっている。そこで、猿股の紐を抜いて、確かめてみても、まさに「紐と穴と口」とが、正しく「一直線上」にあるのでした。彼は、思わず叫びそうになったが、やっところらえて、遂にその時が来た「喜び」と、一方では言い知れぬ「恐怖」とが交錯をして、一種異様の「興奮」のために、彼の顔は、真つ青になっていった。そして、「……彼はポケットから、毒薬の瓶を取り出すと、独りでに震え出す手先を、じつとためながら、その栓を抜き、紐で見当をつけておいて、ポトリ、ポトリ、ポトリ、と数滴、下に落として、それがやっとした」とある。

一方、下で寝ている遠藤は、口をムニヤムニヤと動かしたり、両手で口をぬぐったり、また、何度も寝返りなどをうちながら、大声を発して苦しみ叫ぶでもなく、やがて、大きなびきをかいてから、しだいに静かになって動かなくなるのでした。——主人公（郷田三郎）は、人殺しなんてこんなあつけないものかと、なんだかガツカリしながらも、まだ数滴残っている「小さな瓶」を下に抛り落として、まさに「自殺」に見せかけるのでした。そうして、節穴をふさいで、天井裏に何か痕跡を残していないか懐中電灯で確かめてから、主人公（郷田三郎）は、自分の部屋へと戻って来るのであった。

そして、彼は、自分の部屋の「押入れ」の中で着物を着はじめるが、ふと猿股の「紐」は、どうしたかと思ひ出して、どこかに置き忘れて来たかと不安になり、あわてて体じゅうを両手でさがしまわると、シャツのポケットに入っているのを見つけてほっとするのであるが、ところが、そのポケットにはもう一つ毒薬の瓶の「コルクの栓」も一緒に入っていて、仕方なく、再び、屋根裏に戻って、遠藤の天井裏の「節穴」から、その「栓」を下に落とすのであった。そして、主人公（郷田三郎）が床にいたのは、午前三時頃であったが、まだ何か抜かりはないかと、その晩の行動を一つ一つ思い出しては確認をして、もう何もないだろうというようにして、夜が明けるまで考え続けていたのでした。

やがて、早起きの下宿人たちが、洗面所へ通るために廊下を歩く足音が聞こえて来ると、主人公（郷田三郎）は、あわてて外出の準備をはじめだが、それは、遠藤の死体が発見されるのを恐れて、そのあいだは外出しているのがいけば安全と考えたが、朝飯も食べずに外出するのは、逆におかしいと考え直して、二時間ほどビクビクした気持ちで床の中にいてから、朝食を急いで食べては、下宿屋を出て、それからどこへいくという当てもなく、ただ時間をつぶすただけに、町から町へとさまよい歩くのであった。

そして、主人公（郷田三郎）が昼ごろに外から帰って来ると、すでに遠藤の死体はかたづけられていて、警察の臨検もすっかりすんでいたが、聞けば、遠藤は、失恋か何かを苦にして、恐らく、自殺したのだろうと、誰もが彼の「自殺」を疑うような気配はなかったという展開から、いよいよ素人探偵「明智小五郎」の登場になるのである。

九、明智小五郎の登場

結局、彼の計画は見事に成功しました。彼がお昼ごろ外から帰った時には、もう遠藤の死骸は取り片づけられ、警察からの臨検もすっかり済んでいましたが、聞けば、案の定、誰

一人遠藤の自殺を疑うものではなく、その筋の人たちも、ただ形ばかりの取調べをすると、じきに帰ってしまったということでした。

遠藤がなぜ自殺したかというその原因は少しも分りませんでした。彼の日頃の素行から想像して、多分痴情の結果であろうということに皆の意見が一致しました。現に最近、ある女に失恋していたという様な事実まで現われて来たのです。なに、「失恋した、失恋した」というのは、彼のような男にとっては、一種の口癖みたいなもので、大した意味があるわけではないのですが、ほかに原因がないので、結局それにきまったわけでした。

のみならず、原因があつてもなくても、彼の自殺したことは、一点の疑いもないのです。入口も窓も、内部から戸締りがしてあつたのですし、毒薬の容器が枕許にころがついて、それが彼の所持品であつたことも分かつているのですから、もう何と疑つて見ようもないのです。天井から毒薬を垂らしたのではないかなど、そんな馬鹿馬鹿しい疑いを起こすものは、誰もありませんでした。

それでも、何だかまだ安心しきれないような気がして、三郎はその日一日、ビクビクものでいましたが、やがて一日二日と経つにしたがつて、彼はだんだん落ちついて来たばかりではなく、はては、自分の手際を得意がる余裕さえ生じて来たのです。「……どんなものだ。さすがは俺だな。見る、誰一人としてここに、同じ下宿屋の一間に、恐ろしい殺人犯人がいることなどには気づかないではないか」と。

彼は、この調子では、世間にどれくらい隠れた処罰されない犯罪があるか、知れたものではないと思うのでした。「……天網恢々疎にして漏らさず」なんて、あれはきつと昔からの為政者たちの宣伝に過ぎないので、或いは人民どもの迷信に過ぎないので、その実は、巧妙にやりさえすれば、どんな犯罪だって、永久に現われなくて済んで行くのだ。彼はそんな風にも考えるのでした。もつとも、さすがに夜などは、遠藤の死顔が目先にちらつくような気がして、何となく気味が悪く、その夜以来、彼は例の「屋根裏の散歩」も中止している始末でしたが、それはただ、心の中の問題で、やがては忘れてしまううことです。実際、罪が発覚させねば、もうそれで十分ではありませんか。

*

*

さて、遠藤が死んでからちようど三日目のことでした。三郎が今、夕飯を済ませて、小楊子を使いながら、鼻唄かなんか歌っている所へ、ヒョッコリと久し振りに明智小五郎が訪ねて来たのでした。「やあ」、「ごぶさた」と、彼らはさも心安げに、こんなふうの挨拶を取り交わしたのですが、三郎の方では、折が折なので、この素人探偵の来訪を、少々気味わるく思わないではいられません。「……この下宿で毒を飲んで死んだ人があるつて言うじゃないか」と、明智は、座につくと、さつそくその三郎の避けたがつて居る事柄を話題にするのでした。恐らく彼は、誰かから自殺者の話を聞いて、幸い同じ下宿に三郎がいるので、持ち前の探偵興味から、訪ねてきたのに相違ありません。

「……ああ、モルヒネだね。僕は丁度その騒ぎの時に居合せなかつたから、詳しいことは分からないけれど、どうも痴情の結果らしいのだ」と、三郎は、その話題を避けたがつていることを悟られまいと、彼自身もそれに興味を持つて居るような顔をして、こう答えるのでした。すると、「……一体どんな男なんだい」と、また明智が尋ねるのでした。それから暫くの間、彼らは遠藤の人となりについて、死因について、自殺の方法について、問答を続けました。三郎は、始めのうちこそビクビクもので明智の問いに答えていま

したが、慣れて来るにしたがつて、だんだんと横着になり、はては、明智をからかつてやりたいような気持にさえなるのでした。

「……君はどう思うね。ひよつとしたら、これは他殺じゃあるまいか。なに別に根拠があるわけじゃないけれど、自殺に相違ないと信じていたのが、実は他殺だったりすることが、往々あるものだからね」と。どうだ、さすがの名探偵もこればかりは分かるまいと、心の中で嘲りながら、三郎はこんなことまで言ってみるのでした。それが彼には愉快で堪らないのです。「……そりゃ何とも言えないね。僕も実は、ある友だちからこの話を聞いた時に、死因が少し曖昧だという気がしたのだよ。どうだろう、その遠藤君の部屋を見るわけには行くまいか」と聞くと、「……造作ないよ」と、三郎はむしろ得々として答えるのであった。「……隣りの部屋に遠藤の同郷の友だちがいてね。それが遠藤の親父から荷物^{おやじ}の保管を頼まれているんだ。君のことを話せば、きつと喜んで見せてくれるよ」

それから、二人は遠藤の部屋へ行ってみることにしました。その時、廊下を先頭になつて歩きながら三郎はふと妙な感じにうたれたことです。「……犯人自身が、探偵をその殺人の現場へ案内するなんて、じつに不思議なことだな」と、ニヤニヤと笑いそうになるのを、彼はやつのことでもこらえました。三郎は、生涯のうちで、恐らくこの時ほど得意を感じたことはありませんまい。「イヨー、親玉ア」、自分自身にそんな掛け声でもしてやりたいほど、水際立つた悪党ぶりでした。

遠藤の友だち——それは北村といって、遠藤が失恋していたという証言をした男です——は、明智の名前をよく知っていて、快く遠藤の部屋を開けてくれました。遠藤の父親が、国もとから出て来て、仮葬^{かそう}を済ませたのが、やっと今日の午後のことで、部屋の中には、彼の持ち物が、まだ荷造りもせず、置いてあるのです。

遠藤の変死が発見されたのは、北村が会社へ出勤したあとだったので、発見の刹那^{せつな}の有様はよく知らないようでしたが、人から聞いたことなどを総合して、彼はかなり詳しく説明してくれました。三郎もそれについて、さも局外者らしく、べらべらとうわさ話などを述べ立てるのでした。明智は二人の説明を聞きながら、如何にも玄人^{くわんと}らしい目くばりで、部屋の中をあちらこちらと見廻していましたが、ふと机の上に置いてあった「目覚まし時計」に気づくと、何を思ったのか、長い間それを眺めているのです。多分、その珍奇な装飾が彼の目を惹いたのかも知れません。「……これは目覚まし時計ですね」、「……そうですよ」と、北村は多弁に答えるのであった。「……遠藤の自慢の品です。あれは几帳面な男でしてね、朝の六時に鳴るように、毎晩欠かさずこれを捲いて置くのです。私なんかいつも隣りの部屋のベルの音で目をさましていたくらいです。遠藤の死んだ日だってそうですよ。あの朝もやっぱりこれが鳴っていましたので、まさかあんなことが起こつていようとは、想像もしなかったのですよ」

それを聞くと、明智は長く延ばした頭の毛を指でモジヤモジヤ掻き廻しながら、何か非常に熱心な様子を示しました。「……その朝、目覚ましは鳴ったことは間違いないでしょうね」、「……エエ、それは間違いありません」、「……あなたは、そのことを、警察の人におっしゃいませんか、妙じゃありませんか。その晩に自殺しようと思った者が、その朝の朝の目覚ましを捲いて置くというのには」、「……なるほど、そう言えば変ですね」と、北村は迂闊^{うかつ}にも、今までこの点に気づかないでいたらしいのです。そして、明智の言

うことが何を意味するかも、まだはっきりと飲み込めない様子でした、が、それも決して無理ではありません。入口の締りのしてあったこと、毒薬の容器が死人のそばに落ちていたこと、その他、すべての事情が、遠藤の自殺を疑いにくいものに見せていたのですから。

しかし、この問答を聞いた三郎は、まるで足もとの地盤が不意に崩れ始めたような驚きを感じました。そして、なぜこんな所へ明智を連れて来たのだろうと、自分の愚かさを悔まないではいられませんでした。

明智はそれから、一層の綿密さで、部屋の中を調べ始めました。むろん天井も見逃すはずはありません。彼は天井板を一枚一枚たたき試みて、人間の出入した形跡がないかを調べまわったのです。が、三郎の安堵したことには、さすがの明智も、節穴から毒薬を垂らして、そこをまた、元通り蓋しておくという新手には、気づかなかつたと見えて、天井板が一枚もはがれていないことを確かめると、もうそれ以上の詮索はしませんでした。

さて、結局その日は別段の発見もなく済みました。明智は遠藤の部屋を見てしまうと、また三郎の所へ戻って、しばらく雑談を取り交したのち、何事もなく帰って行つたのです。ただ、その雑談の間に、次のような問答のあったことを書き洩らすわけには行きません。なぜと言って、これは一見ごくつまらないように見えて、その実、このお話の結末に最も重大な関係を持っているのですから。

その時、明智は、袂から取り出した煙草に火をつけながら、ふと気がついたようにこんなことを言つたのです。「……君はさつきから、ちつとも煙草を吸わないようだが、よしたのかい」と。そう言われてみると、なるほど、三郎はこの二、三日、あれほど大好物の煙草を、まるで忘れてしまったように、一度も吸っていないのでした。「……おかしいね。すっかり忘れていたんだよ。それに、君がそうして吸っていても、ちつとも欲しくならないんだ」と言うと、「……いつから？」と聞かれ、「……考えて見ると、もう二、三日吸わないようだ。そうだ、ここにある敷島を買つたのが、たしか日曜日だったから、もうまる三日の間、一本も吸わないわけだよ。一体、どうしたんだろう」と言うので、「……じゃ、ちょうど遠藤君が死んだ日からだね」と言われ、それを聞くと、三郎は思わずハツとするのでした。しかし、まさか遠藤の死と、彼が煙草を吸わないこととの間に因果関係があるうとも思われませんので、その場合は、ただ笑つてすませたことですが、後になつて考えて見ますと、それは決して笑い話にするような、無意味な事柄ではなかつたのです。——そして、この三郎の煙草嫌いは、不思議なことに、その後いつまでも続きました。

十、明智の推理

さて、明智小五郎が、主人公（郷田三郎）のところにやつて来るのは、遠藤が死んでから三日目のことであつた。それは、夕食をすませて、ゆったりとしてるところに、ひよっこりと現われて、「やあ」、「ごふさた」というような感じで、お互いに挨拶をし合い、明智は、「……この下宿で毒を飲んで死んだ人があるつていうじゃないか」と言うと、「……ああ、モルヒネでね、僕はその時いかなかったが、どうも痴情の結果らしいのだ」と応えるのであつた。——とところで、「推理小説」には、必ず、「隠し球」（いわば「決め手」）というものがあつて、まさにその決定的な「証拠」を相手（犯人）に突きつけると、相手（犯人）は、ついに観念して「犯行を認める」というようなものである。

そして、この「小説」にも、当然のことながら、まさに「二つの隠し球」が用意されているが、それは、最初から終盤まで「完全に伏されているもの」であり、犯人も（読者も）、それを全く知らないのである。そして、例えば、明智なら明智が、最後に、相手（犯人）を追い詰めていく時に、初めて、まさに「登場して来る」ものであり、それまでは、相手（犯人）は、自分の「犯行」には絶対的な「自信」を持っていて、絶対にバレるはずはないと思っているわけである。ところが、その決定的な「隠し球」（いわば「決め手」）を突きつけられると、相手（犯人）は、一気に「心が動揺して」きて、まさに「絶対的な自信」がたがたと音を立てて崩れはじめ、そして、最後には「犯行を認める」ような展開へとなっていくが、むろん、その場面こそは、まさに一番の「見せ場」になるのである。

さて、明智は、遠藤とは「いったいどんな男なんだい」と聞くと、主人公（郷田三郎）は、いろいろと説明しながらも、明智をちよつとからかってやろうという気持ちにさえなつて、「……君はどう思うね、ひよつとしたら、これは他殺じゃあるまいか」などと言つたりするが、それに対して、明智は、「……それは何とも言えないね。……どうだろう、その遠藤君の部屋を見るわけにはいくまいか」と聞くと、「造作ないよ」、「……隣りの部屋に遠藤の同郷の友だちがいて、（有名な）君のことを話せば、きっと喜んで見せてくれるよ」ということで、やがて三人で遠藤の「部屋」へと入ることになるが、その遠藤の友だちというのは、北村といつて、遠藤の（部屋の管理や）失恋を証言した男でもあり、明智は、遠藤の部屋の中をあちこち見まわしていたが、ふと机の上に置いてある目覚まし時計に気づくのであった。そして、「これは目覚まし時計ですね」と言うと、次こそ、まさに「隠し球」の一つであるが、北村は、「そうですね」、「……遠藤の自慢の品です。あれは几帳面な男でしてね、朝の六時に鳴るように、毎晩欠かさずにこれを捲いておくのです。私なんかいつも隣りの部屋のベルの音で眼をさましていたくらいです。遠藤の死んだ日だつてそうですね。あの朝もやっぱりこれが鳴っていました」と言うのである。

まず、遠藤は、几帳面な男であった。この「設定」は、まさに「絶対条件」であり、仮に「いいかげんな性格」であれば、いつもきっちりと同じ場所（位置）で寝るようなこともないだろうし、また、朝の六時に鳴るように、毎晩欠かさずに目覚まし時計のねじを捲いておくことも、成り立たないことになってしまうからである。そこで、明智は、「あの朝、目覚まし時計が鳴ったことは間違いないでしょうね」と、念を押して聞いている。それは、まさに「決定的な決め手」の一つとなり得るからである。なぜなら、これから「自殺を図ろう」と決心している人が、わざわざ目覚まし時計のねじなど捲くものだろうかという問題である。もちろん、毎日の習慣でほとんど無意識的に捲いてしまったという可能性も残るので、これだけではまだ不十分なのである。それゆえ、もう一つの「隠し球」（いわば「決め手」）がどうしても必要不可欠になって来るとともに、それは、最後の最後まで取って置くという「手法」になっているのである。そして、このことは、主人公（郷田三郎）にとつては、まるで足許の地盤が不意に崩れ始めたような驚きを感じた、とある。

一方、明智は、いつそう綿密に部屋の中を調べはじめたが、それはもちろん、天井も見逃すはずはなく、天井板一枚一枚をたたいて試して、人間の出入りした形跡はないかを調べまわったが、これという新たな発見もなく、遠藤の部屋を出ては、再び、三郎の部屋に戻り、しばらく雑談をするが、その中にこそ、まさに第二の「隠し球」（いわば「決め手」）となるヒントが隠されているのである。それは、次のような内容である。つまり、明智は、

袂から煙草を取り出して、それに火をつけて吸い始めるのだが、その時に、「……君はさつきから、ちっとも煙草を吸わないね、よしたのかい」と聞かれて、三郎は、「……おかしいね、すっかり忘れていたんだ。君が吸っていても少しもほしくならない」のだと言う。あれほど好きだった煙草を、「いつから？」と聞かれると、「……もう二、三日吸わないようだ」と、三郎にもその理由がよく分からない状態であり、明智は、「……じゃあ、ちやうど遠藤君の死んだ日からだ」と言うのであった。もちろん、それには、当然のことながら、深い理由がはつきりとあるのだが、それこそ、まさに第二の「隠し球」（いわば「決め手」となるものである。やがて、明智は、何事もなく帰って行くのであった。

十一、推理の決め手

三郎は、その当座、例の目覚まし時計のことが、何となく気になって、夜もおちおち眠れないのでした。たとえ遠藤が自殺したのでないということが分かつて、彼がその手下人だと疑われるような証拠は、一つもないはずですから、そんなに心配しなくともよさそうなのですが、でも、それを知っているのがあの明智だと思うと、なかなか安心はできないのです。——ところが、それから半月ばかりは何事もなく過ぎ去ってしまいました。心配していた明智もその後一度もやって来ないので、「……やれやれ、これでいよいよおしまいか」と、そこで三郎は、ついに気を許すようになりました。そして、時々恐ろしい夢に悩まされることはあっても、大体において、愉快な日々を送ることができたのです。殊に彼を喜ばせたのは、あの殺人罪を犯して以来というもの、これまで少しも興味を感じなかつたいろいろな遊びが、不思議と面白くなつて来たことです。ですから、この頃では、毎日のように、彼は家を外にして、遊びまわっているのです。

ある日のこと、三郎はその日も外で夜をふかして、十時頃に家へ帰ったのですが、さて寝ることにして、蒲団を出すために、何気なく、スーツと押入れの襖をあけた時でした。「ワツ」と、彼はいきなり恐ろしい叫び声を上げて、二、三步あとへよろめきました。彼は夢を見ていたのでしょうか。それとも、気でも狂ったのではありますまいか。そこには、押入れの中には、あの死んだ遠藤の首が、髪の毛をふり乱して、薄暗い天井から、逆さまにぶら下がっていたのです。

三郎は、いったんは逃げ出そうとして、入口の所まで行きましたが、何かほかのものを間違えたのではないかという様な気もするものですから、恐る恐る引き返して、もう一度、そつと押入れの中を覗いてみますと、どうして、間違いでなかつたばかりか、今度はその首は、いきなりニツコリと笑つたではありませんか。

三郎は、再びアツと叫んで、ひと飛びに入口の所まで行って障子を開けると、やにわに外へ逃げ出そうとしました。すると、「……郷田君。郷田君」、それを見ると、押入れの中では頻りに三郎の名前を呼び始めるのです。「……僕だよ。僕だよ。逃げなくともいいよ」と、それは、遠藤の声ではなくて、どうやら聞き覚えのある、ほかの人の声だったものですから、三郎はやつと逃げるのを踏みとどまって、こわごわ振り返って見ますと、「失敬失敬」と、そう言いながら、以前よく三郎自身がしたように、押入れの天井から降りて来たのは、意外にも、あの明智小五郎でした。

「……驚かせて済まなかつた」と、押入れから出た洋服姿の明智が、ニコニコしながら

言うのです。「……ちよつと君の真似をして見たのだよ」と。それは実に、幽霊なぞよりはもつと現実的な、いっそう恐ろしい事実でした。明智はきつと、何もかも悟ってしまったのに相違ありません。

その時の三郎の心持は、実に何とも形容のできないものでした。あらゆる事柄が、頭の中で風車のように回転して、いっそう何も思うことがない時と同じように、ただぼんやりとして、明智の顔を見つめている外はないのです。「……早速だが、これは君のシャツのボタンだろうね」と、明智は、いかにも事務的な調子で始めました。手には小さな貝ボタンを持って、それを三郎の眼の前につき出しながら、「……ほかの下宿人たちも調べて見たけれども、誰もこんなボタンをなくしているものはないのだ。ああ、そのシャツのだね。そら、二番目のボタンがとれているじゃないか」と言うのであった。

ハツと思つて、胸を見ると、なるほど、ボタンが一つとれています。三郎は、それがいつとれたのやら、少しも気がつかないでいたのです。「……形も同じだし、間違いないね、ところで、このボタンをどこで拾つたと思う。天井裏なんだよ、それも、あの遠藤君の部屋の上でだよ」と。それにしても、三郎はどうして、ボタンなぞを落として、気づかないでいたのでしょうか。それに、あの時、懐中電燈で十分調べたはずではありませんか。「……君が殺したのではないかね。遠藤君は」と、明智は無邪気にニコニコしながら、——それがこの場合一層気味悪く感じられるのです——三郎のやり場に困つた眼の中を、覗き込んで、とどめを刺すように言うのでした。

三郎は、もう駄目だと思ひました。たとえ明智がどんな巧みな推理を組み立てて来ようとも、ただ推理だけであつたら、いくらでも抗弁の余地があります。けれども、こんな予期しない証拠物をつきつけられては、どうすることもできません。三郎は今にも泣き出そうとする子供のよな表情で、いつまでもいつまでも黙りこくつて突つ立っていました。時々ぼんやりと霞んで来る目の前には、妙なことに、遠い遠い昔の、例えば、小学校時代の出来事などが、幻のように浮き出して来たりするものでした。

*

*

それから二時間ばかりのち、彼らはやつぱり元のままの状態で、その長い間、ほとんど姿勢さえもくずさず、三郎の部屋で相對していました。「……ありがとう、よくほんとうのことを打ち開けてくれた」と、最後に明智が言うのでした。「……僕は決して君のことを警察へ訴えなぞしないよ、ただね僕の判断が当たっているかどうか、それが確めたかったのだ。君も知っている通り、僕の興味はただ『真実を知る』という点にあるので、それ以上の上のことは、実はどうでもいいのだ。それにね、この犯罪には、一つも証拠というものが、ないのだよ。シャツのボタン、ハハ……、あれは僕のトリックさ。何か証拠品がなくては、君が承知しまいと思つてね。この前君を訪ねた時、その二番目のボタンがとれていることに気づいたものだから、ちよつと利用して見たのさ。なに、これは僕がボタン屋へ行つて仕入れて来たのだよ。ボタンがいつとれたなんていうことは、誰しもあまり気づかないことだし、それに、君は興奮している際だから、多分うまく行くだろうと思つてね。

僕が遠藤君の自殺を疑い出したのは、君も知つているように、あの目覚まし時計からだ。あれから、この管轄の警察署長を訪ねて、ここへ臨検した一人の刑事から、詳しく当時の模様を聞くことができたが、その話によると、モルヒネの瓶が、煙草の箱の中にころがっていて、中味が巻煙草にこぼれかかっていたというのだ。警察の人たちはこれに別段注意

を払わなかったようだが、考えて見ればはなはだ妙なことではないか、聞けば、遠藤は非常に几帳面な男だと言うし、ちゃんと床に這入って死ぬ用意までしているものが、毒薬の瓶を煙草の箱の中へ置くさえあるに、しかも中味をこぼすなどというのは、何となく不自然ではないか。

そこで、僕はますます疑いを深くしたわけだが、ふと気づいたのは、君が遠藤の死んだ日から煙草を吸わなくなっていることだ。この二つの事柄は、偶然の一致にしては、少し妙ではあるまいか。すると、僕は、君が以前犯罪の真似ごとなどをして喜んでいたことを思い出した。君には変態的な犯罪嗜好があったのだ。

僕はあれからたびたびこの下宿へ来て、君に知れないように遠藤の部屋を調べていたのだよ。そして、犯人の通路は天井の外にないということが分かったものだから、君のいわゆる『屋根裏の散歩』によって、下宿人たちの様子を探ることにした。殊に、君の部屋の上では、たびたび長い間うずくまっていた。そして、君のあのイライラした様子を、すっかり隙見してしまつたのだよ。

探れば探るほど、すべての事情が君に指さししている。だが、残念なことには、確証というものが一つもないのだ。そこでね。僕はあんなお芝居を考え出したのだよ、ハハハハハハ。じゃ、これで失敬するよ。多分もう御目にかかれまい。なぜって、そら、君はちゃんと自首する決心をしているのだからね」

三郎は、この明智のトリックに対しても、もはや何の感情も起こらないのでした。彼は明智の立ち去るのも知らず顔に、「……死刑にされる時の気持は、一体どんなものだろう」と、ただそんなことを、ぼんやりと考え込んでいたのでした。

彼は毒薬の瓶を節穴から落した時、それがどこへ落ちたのかを見なかったように思っていましたけれど、その実は、巻煙草に毒薬のこぼれたことまで、ちゃんと見ていたので。そして、それが意識下に押しこめられて、心理的に彼を煙草嫌いにさせてしまつたのでした。(完)

十一、推理の決め手(その要旨)

さて、明智がその「姿」を再び主人公(郷田三郎)の前に見せるのは、それから半月ばかり経った後であり、その間は、言うまでもなく、ずっと「推理と捜査」などをし続けていて、そして、ついにその「推理の結論」が出たからこそ、再び、その「姿」を現わすという展開になるのである。一方、そのあいだ、主人公(郷田三郎)は、例の目覚まし時計のことなどが気になっていたが、しかし、たとえ遠藤が「自殺」ではなく、まさに「他殺」だとしても、自分の犯行だという「証拠」など何一つ残していないのだから、そんなに心配することもないかと思いつながら、しかし、相手が名探偵「明智小五郎」だけになかなか安心はできずにいたが、半月もその「姿」を自分の前に見せないの、「やれやれ、これはいよいよおしまいか」と、ついに気を許すようになっていたのである。そして、犯行以降は、今まで興味を感じなかった色々な遊びが、不思議と面白くなって来たのである。

さて、ある日のこと、外から夜の十時頃に「自分の部屋」へと帰ってきて、さて寝ようかと、布団を出すために、押入れの襖をあけた途端に、突然、天井から死んだ遠藤の首が髪を振り乱して逆さまにぶら下がっているのを見て、主人公(郷田三郎)は、思わず「ワ

ッ」と大声で叫んで、二、三歩、後ずさりして、入り口まで逃げるが、再び、確かめに戻ってきて、押入れの中を覗いて見ると、今度は、その首がいきなりニコリと笑うのであった。もちろん、それは、明智小五郎であるが、「ちよつと君のまねをしてみたのだよ」と言うのであった。——つまり、明智小五郎も、まさに「屋根裏の散歩」を実際に何回も行って、そして、遠藤の「天井裏」に、この「ボタン」（それは「三郎が今着ているシャツのボタン」）が一つ落ちていたなどという、まさに「大ウソ」（実際はボタン屋で買って来たもの）を見せて、主人公（郷田三郎）の驚く「反応」（度肝を抜かれた様子）などを確かめ見極めようとしているのである。そして、「……君が殺したのではないのかね、遠藤君を」という言葉に対して、主人公（郷田三郎）は、もうだめだと思ふのであった。

それは、最初、何の前ぶれもなく、まさに完全に安心しきっていた「心の状態」の時に、何気なく押入りの襖を開けた途端、突然として、死んだ遠藤の首が髪を振り乱して逆さまにぶら下がっているのを見た時には、さすがの主人公（郷田三郎）も、まさに「度肝を抜かれてしまった」とともに、それに加えて、遠藤の「天井裏」に何と自分のシャツの「ボタン」が一つ落ちていたなどと、まさに自分の目の前にその具体的な証拠まで突きつけられるという、これらの明智の巧みな「トリック」（つまり「人をだます仕掛け」）によつて、主人公（郷田三郎）という人は、完全に打ちのめされてしまい、もう明智と戦つて反論するという気力さえ奪われてしまったのである。

そして、いわゆる「主人公」（郷田三郎）こそは、真犯人である、という「結論」を出すまでの、まさに「推理の経緯」については、次のように語っているのである。

まず、明智小五郎が、最初に遠藤の「自殺」に疑問を抱いたのは、やはり例の「目覚まし時計」からであり、そこで、「……管轄の警察署を訪ねては、その現場を臨検した一人の刑事から、当時の模様を詳しく聞くことができた」とある。その話によると、「……モルヒネの瓶が、煙草の箱の中ころがっていて、中身が巻煙草にこぼれかかっていたというのである。……そこで、ふと気づいたのは、主人公（郷田三郎）が遠藤の死んだ日から煙草を吸わなくなっている」ということであつた。そこで、半月前から、明智は、たびたびこの下宿屋にやつて来ては、主人公（郷田三郎）に知られないように「遠藤の部屋」を調べていたとともに、いわゆる「屋根裏の散歩」によつて、下宿人の様子などもさぐることにしたが、特に主人公（郷田三郎）の部屋の上では、たびたび長くうずくまっていた、彼のイライラする様子なども上から隙見していたと言ふのである。そして、さぐればさぐるほど君が疑わしくなるが、しかし、これという「確証」が何一つないので、仕方なく、あのような「お芝居」をしたと言ふのである。——つまり、主人公（郷田三郎）のその「驚く姿」（反応の仕方）を見て、まさに「真犯人であるという確証を得た」ということである。一方、主人公（郷田三郎）という人は、やがて、「自首」を覚悟するのであつた。

そして、『屋根裏の散歩者』という作品の「本文」の最後は、次のような「文章」で終わっている。それは、「……彼は毒薬の瓶を節穴から下に落とす時、それがどこへ落ちたかを見なかつたように思っていたが、しかし、その実は、巻煙草に毒薬のこぼれたことまで、ちゃんと見ていて、それが意識下に押し込められて、心理的に彼を煙草嫌いにさせてしまった」という結論になるのである。そして、これこそは、まさに第二の「隠し球」であるとともに、まさに事件解決の「決め手」ともなっているものである。

例えば、前述の『心理試験』という作品の中にも、当然のことながら、いわゆる「推理小説」である限りは、必ず、「隠し球」（いわば「決め手」）というものが用意されていて、まさにその決定的な「証拠」を相手（犯人）に突きつけると、相手（犯人）は、ついに観念して「犯行を認める」というようなものである。それは、一体、どういふものだったかと問えば、それは、次のようなものである。——つまり、苦学生の主人公（ふみやせいじろう 露屋清一郎）という大学生は、「……事件の二日前に、屏風を見たと言っている」のである。実際、二日前に老婆の部屋に入って世間話をしているのである。それは、一体、何のためかと言え、それは、斎藤から例の隠し場所を聞いてから、もう半年を過ぎた今、それが当時のままかを確かめるためであり、その方法は、お金を隠しているような噂があるような話をすると、彼女（老婆）の目は、その都度、床の間の植木鉢にそっと注がれ、それを見て、間違いないと確信するのであるが、その日に、屏風を見たと言っているのである。

ところが、その「屏風」というのは、実は、「……事件の前日に持ち込まれたものであり、事件の二日前には、その部屋には屏風などなかった」のである。——つまり、「事件」当日には、確かに「屏風」があり、その「屏風」の小野小町の顔のところに少し傷を付けてしまったために、そのことがあまりに強く「頭」（印象）に深く残ってしまったがために、事件の二日前にも、当然のことながら、その部屋に「屏風」はあったはずだと「錯覚」（勘違い）をしてしまい、つい「その屏風のことなら覚えていゝ」などと軽々しく口走ってしまい、しかも、主人公（ふみやせいじろう 露屋清一郎）という人は、その「屏風」には、極彩色の『六歌仙』の絵が描かれている、とまで言ってしまったのである。

それでは、なぜ、これが「致命的な失言」となるのかと言え、それは、「……あの部屋に入ったのはたつた一度きりで、しかも、事件の二日前である」と言っている。つまり、事件の二日前と言え、部屋にはまだ「屏風」などなかった状態である。そのなかったはずの「屏風」があつたと言ひ、しかも、その屏風には『六歌仙』の絵が描かれていたなどと、見てもいないのに、どうして言えるのか？ それは、まさに「事件」当日に、その「屏風」を見たからであり、もちろん、見ただけではなく、その「屏風」の小野小町の顔のところに少しばかり傷を付けてしまったというあまりに強い「意識」があつたがために、また、犯人は「さいとうさむ 斎藤勇」で決定ということ、すっかり気をゆるめてしまい、いわばうかれ気分、このような「致命的な失言」を生み出す要因になつてしまったのである。

*

*

つまり、それは、最初から終盤まで「完全に伏されているもの」であり、作者以外、誰も、犯人も（読者も）、そのことを全く知らないものである。そして、例えば、明智なら明智が、最後に、相手（犯人）を追い詰めていく時に、初めて、まさに「登場して来る」ものであり、それまでは、相手（犯人）は、自分の「犯行」には絶対的な「自信」を持っていて、絶対にバレるはずはないと思つていゝのである。——ところが、その決定的な「隠し球」（いわば「決め手」）を突きつけられると、相手（犯人）は、一気に「心が動揺して」きて、まさに「絶対的な自信」ががたがたと音を立てて崩れはじめ、そして、最後には「犯行を認める」ような展開へとなつていくとともに、その場面展開こそは、まさに「推

理小説」の一番の「見せ場」にもなっているのである。

* *
例えば、有名な『刑事コロンボ』の場合にも、基本的には全く同じことであり、犯人は、すべて「知能犯」（完全犯罪を狙う人）であり、しかも、最初から犯人が「人を殺す場面」とその後の「推移」その他などもすべて（九十九%まで）見せてしまい、最後に、たった一つだけ残して置いた「決定的な証拠」（残りの1%だけ）を以って、犯人を最後追い詰める、そして、終に「落とす」という手法なのである。その一つの例として、記憶は極めて不確かであるが、確か次のような内容の作品があったかと思う。——それは、まず、完全犯罪を狙う犯人は、相手がある「密室」へと閉じ込めてしまうのである。その「部屋」というのは、（例えば、銀行の何か金庫室のような部屋で）、内からは絶対に外に出られないような「完全なる密室」という設定なのである。そして、その「完全なる密室」に閉じ込められてしまった人は、土、日は、会社は休みなので、誰も助ける人もなく、やがて「酸欠」で死んでしまうのである。そして、月曜日になって、その「完全なる密室」を開けると、そこには閉じ込められていた人が床に倒れて死んでいるのである。彼をずっと捜していた刑事コロンボをはじめ、それを見た人たちはみな、彼は誤って密室に閉じ込められてしまい、内から外に出られずに死んでしまったのだと、まさに誰もが「事故死」だと思いつ込んでしまい、そこに茫然と立ち尽くすばかりとなるとともに、そこに居合わせていた犯人も、これで「完全犯罪」が成立したとニンマリと微笑むのである。……

そして、カメラは、床に倒れている人に近づいていき、最後は顔をアップに撮って、確かに死んでいることを確かめるのである。それから、カメラは、ずっと引いて、今度は、右側の方の白い壁を映し出すのである。最初は、何もないが、ゆっくりとカメラを右側へと移動していくと、その白い壁に何か「傷か汚れ」のようなものが付いている。あれは一体何だろうという感じで、カメラは、ゆっくりとその「傷か汚れ」のように見えるものと近づいていくと、そこには何と死んだ人が死ぬ前に書いた「ダイニング・メッセージ」が書いてあり、それは、もう助からないと覚悟を決めた時に、自らの手首を切って、その真っ赤な血を使って指で書いた文字であり、「……私は、誰々に閉じ込められて、殺された」と書いてあるのである。そして、ドラマは、この場面で音楽が流れて終わるのである。つまり、最後の最後になって、初めて、誰一人知らない、とっておきの「隠し球」（つまり「決め手」）が登場して来るといって典型的な例になるのである。

* * *

「参考文献」

- ※底本 「D坂の殺人事件」 江戸川乱歩著（「青空文庫」）
- ※底本 「屋根裏の散歩者」 江戸川乱歩著（「青空文庫」）
- ※底本 「江戸川乱歩傑作選」（「新潮文庫」）